

2025 年度 FD 活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会

委員長（学長） 小檜山 ルイ

副委員長（教務部長） 古内 洋平

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでもさまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2025 年度の大学 FD 勉強会では「大学×地域×社会——連携から生まれる新しい学び」と題し、社会連携をテーマに、授業の中で先進的な取り組みを実践している教員 3 名から事例共有をいただき、社会連携への理解を深め、本学の今後の社会連携活動の活性化について考える機会をもちました。

加えて、「大学教育における生成 AI の活用：可能性と課題」と題した FD 勉強会を開催し、実際に AI を教育に積極的に活用されている教員 2 名から、主にレポート等の作成にかかわる具体的な使用方法や、教育上の効果、問題点や課題についてお話いただき、AI 時代の学びや教育のあり方を考える機会をもちました。

さらに、2024 年度に引き続き、2023 年度から導入したアセスメント・テスト「GPS-Academic」の分析報告会を開催し、分析結果を共有し、意見交換を行う場をもちました。

2025 年度も中期計画に沿って「各所管における FD 勉強会」を積極的に開催することとし、大学の FD 活動の活性化につなげることができました。

その他、例年どおり授業アンケートや学修行動調査、卒業生調査を実施し、学生の実態を把握するための情報収集に努めるとともに、大学院では博士後期課程の学生に対して、教育能力向上のために FD 活動への参加を課すなどの取り組みも継続しています。

内容

大学 FD 勉強会「大学×地域×社会——連携から生まれる新しい学び」	2,8
大学 FD 勉強会「大学教育における生成 AI の活用：可能性と課題」	2,20
「2025 年度アセスメント・テスト分析報告会」	2,31
学修行動調査	3
授業アンケートと授業改善計画	4
卒業生調査	5
PBL 科目の推進	5
大学院の FD 活動	5
2025 年度活動内容	6

大学 FD 勉強会「大学×地域×社会——連携から生まれる新しい学び」

概要

日 時: 2025 年 7 月 30 日(水) 15:00～16:00
会 場: オンライン(Google Meet)
題 目: 大学×地域×社会——連携から生まれる新しい学び

詳細は、p.8 を参照ください。

大学 FD 勉強会「大学教育における生成 AI の活用：可能性と課題」

概要

日 時: 2025 年 10 月 29 日(水) 11:00～12:00
会 場: 対面及びオンライン(Google Meet)
題 目: 大学教育における生成 AI の活用:可能性と課題

詳細は、p.20 を参照ください。

「2025 年度アセスメント・テスト分析報告会」

概要

日 時: 2025 年 7 月 30 日(水)16:30～18:00
会 場: オンライン(Zoom)
題 目: アセスメント・テスト分析報告会

詳細は、p.31 を参照ください。

学修行動調査

学修状況（学修時間の実態や学修行動）や、学修成果の把握及び教育の内部質保証、本学学生の経年変化を把握するため、ベネッセ・キャリアのアセスメント・テスト「GPS-Academic」を実施しました。これにより、主観調査だけではなく客観調査に対応し、多面的な学修成果を可視化することを狙いとしています。なお、Ferris 学修行動調査については、文部科学省が実施している「全国学生調査」を本学でも実施することを目的として、2025 年度は単独での実施はせず「GPS-Academic」内の設問に組み込み実施しました。なお、全国学生調査では測定できない教育成果指標（DP）や学修内容の質等に関わる本学固有の設問は、独自の設問として追加しています。

【GPS-Academic】

目的	(1) 学生の学修状況(学修時間の実態や学修行動)の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 1 年次生・2 年次生・3 年次生・4 年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	1 年次生 2025 年 3 月 18 日(火)～5 月 31 日(土) 2 年次生 2026 年 1 月 13 日(火)～2 月 27 日(金) 3 年次生 2025 年 10 月 20 日(月)～2026 年 2 月 27 日(金) 4 年次生 2025 年 12 月 1 日(月)～2026 年 2 月 27 日(金)
回答率	55.2%(実施対象者:1,758 名、回答者数:970 名)
設問の概要	以下の項目を通して、問題解決能力を客観評価・主観評価する。 ・思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力) ・姿勢・態度(レジリエンス、リーダーシップ、コラボレーション) ・経験(自己管理、対人関係、計画・実行)

【FERRIS 学修行動調査】※単独では実施せず、アセスメント・テスト「GPS-ACADEMIC」に組み込み実施

目的	(1) 学生の学修状況(学修時間の実態や学修行動)の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2 年次生・4 年次生
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (5) その他
本学独自設問として追加した項目	☐ 入学した時点とくらべて変化した能力や知識 ☐ 教養 ☐ 国際的な諸問題に対する関心や理解力 ☐ 表現すべき内容の文章を書く力

※実施方法、実施期間及び回答率は【GPS-Academic】と同様。

授業アンケートと授業改善計画

2025 度も授業アンケート及び授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的としたものです。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目	
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目):2025 年 7 月 12 日(土)～25 日(金)
		授業アンケート(集中講義):第 1 ターム 7 月 30 日(水)～8 月 12 日(火)
		第 2 ターム 8 月 25 日(月)～9 月 5 日(金)
	後期	授業アンケート(通常科目):2026 年 1 月 5 日(月)～1 月 24 日(土)
		授業アンケート(集中講義):第 1 ターム 2 月 2 日(月)～2 月 13 日(金)
		第 2 ターム 3 月 5 日(木)～3 月 15 日(日)
回答率	(前期)18.7% (後期)14.7%	

【授業改善計画】

対象者	全教員	
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用	
実施期間	前期	授業アンケート(通常科目):2025 年 7 月 29 日(火)～8 月 20 日(水)
		授業アンケート(集中講義):第 1 ターム 8 月 21 日(木)～9 月 4 日(木)
		第 2 ターム 9 月 9 日(火)～9 月 23 日(火)
	後期	授業アンケート(通常科目):2026 年 1 月 27 日(火)～2 月 20 日(金)
		授業アンケート(集中講義):第 1 ターム 2 月 17 日(火)～3 月 13 日(金)
		第 2 ターム 3 月 17 日(火)～3 月 31 日(火)
提出率	(前期)80.2% (後期)74.6%	

卒業生調査

卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する期待、要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

大学時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業としては、毎年、語学科目や共通科目が挙げられます。自分の所属学科の科目だけではなく、幅広い関心を持つことの大切さを実感していることが分かります。また、本学で学んだ／出会ったことで今「とても役に立った」と思うこと（自由記述）の設問からは、大学で学ぶ知識や経験のほかにも、For Others の精神、様々な人との出会いを糧にそれぞれ社会で活躍されていることが分かる結果となりました。

また、2022 年度からは在学生に対して、このように様々な環境にいる先輩たちが、自身のフェリスでの学びを振り返った時に感じていることを共有して、より充実した学生生活を送ることができるようメッセージを発信しました。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

【調査及び結果概要】

実施期間：2025 年 10 月 7 日～11 月 17 日

実施方法：葉書で依頼し、web にて回答

対象人数：508 名（2020 年 3 月出学者）

有効回答：65 名（回答率 12.8%）

PBL 科目の推進

中期計画 21-25 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費（交通費等）の補助が挙げられます。

2025 年度は、支援対象科目 10 科目（履修者数 123 名）のうち、申請のあった 17 名に 31,129 円（予算執行率 20.8%）の支援を実施しました。

大学院の FD 活動

2020 年度より、教育能力向上を目的として、大学院博士後期課程学生にプレ FD を実施することが、大学 FD 活動計画に明記されました。対象の大学院生は、大学 FD 講演会や授業参観に参加して「FD 活動報告書」を提出しました。

授業参観に参加した大学院生は以下のように考えました。

- ・授業は興味深く、あっという間に終了していた。授業における DVD の使用やわかりやすい説明の大切さを知った。
- ・AI を活用されている他専攻の先生の話をお聞きすることができ、良かったです。AI の発展や社会での活用は早いスピードで進んでいるので、AI についての講演会は今後も定期的に開催していただき、AI を活用して研究されている先生方の実例などをお聞きすることができれば、研究に役立てられると思いました。
- ・遠隔授業であることから、どの程度のフィードバックが返ってくるのか、対面に比べてどの態度生徒の反応や交流があるのか、それにどのように対応しているのかなどに参観前は興味があったが、むしろ遠隔だからこそ生徒たちの熱量や意欲を、都度の課題提出とフィードバックというより分かりやすい形で目に見えるようにすることが教える側としてもモチベーションにつながると感じた。

2025 年度 活動 内容

期間	テーマ、トピック	主催
3 月中旬～5 月下旬	アセスメント・テスト「GPS-ACADEMIC」(対象：1 年次生)	大学 FD 委員会
5 月下旬～7 月中旬	前期授業アンケート実施(授業への要望)	大学 FD 委員会
6 月 7 日(土) ～6 月 27 日(金)	専任教員による授業参観(対象：専任教員担当科目)	大学 FD 委員会
7 月中旬～9 月上旬	前期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学 FD 委員会
7 月 9 日(水)	FD 勉強会「校外実習の現状と今後のあり方について一登録実践研修を見据えて」	文学部日本語日本文学科 日本語教員養成講座
7 月 16 日(水)	FD 勉強会「今後の大学院生の指導について」	国際交流研究科
7 月 30 日(水)	FD 講演会「大学×地域×社会——連携から生まれる新しい学び」	大学 FD 委員会
7 月 30 日(水)	アセスメント・テスト分析報告会	大学 FD 委員会
7 月下旬～9 月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
9 月 17 日(水)	FD 勉強会「生成 AI が“学び”を変えるとき— 教員×学生×AI のリアルな授業と研究実践 —」	文学部 コミュニケーション学科
9 月 27 日(土)	Ferris University English-language Teacher Faculty Development	英語教育運営委員会
10 月 1 日(水)	FD 勉強会「初年次の「導入ゼミ」について」	国際交流学部 グローバル教養学部国際 社会学科
10 月初旬～11 月中旬	教育の質向上に向けた取り組み—卒業生調査	大学 FD 委員会
10 月中旬～2 月下旬	アセスメント・テスト「GPS-ACADEMIC」(対象：3 年次生)	大学 FD 委員会
10 月 29 日(水)	FD 講演会 「大学教育における生成 AI の活用：可能性と課題」	大学 FD 委員会
11 月中旬～1 月上旬	後期授業アンケート実施(授業への要望)	大学 FD 委員会
12 月初旬～2 月下旬	アセスメント・テスト「GPS-ACADEMIC」(対象：4 年次生) ※FERRIS 学修行動調査を兼ねる	大学 FD 委員会
12 月 3 日(月)	FD 勉強会「「学科の学び」について考える」	グローバル教養学部 心理コミュニケーション 学科
1 月上旬～3 月中旬	後期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学 FD 委員会
1 月 10 日(土)	FD 勉強会「本学を卒業した留学生から聞く在学中の学びと就職活動経験」	留学生科目委員会
1 月中旬～2 月下旬	アセスメント・テスト「GPS-ACADEMIC」(対象：2 年次生) ※FERRIS 学修行動調査を兼ねる	大学 FD 委員会
1 月 21 日(水)	FD 勉強会「学校での性暴力の未然防止のために～性的マイノリティの方々の声～」	教職課程
1 月下旬～3 月下旬	授業改善計画	大学 FD 委員会
2 月 10 日(火)	FD 勉強会「学生のメンタルヘルスケアについて」	文学部英語英英米文学科 グローバル教養学部文化 表現学科
2 月 20 日(金)	FD 勉強会「女子大学におけるキャリア形成支援について」	CLA コア科目運営委員会 キャリア支援課 ジェンダースタディーズ センター
2 月 24 日(火)	FD 勉強会「大学院(人文科学研究科)で学ぶということ—その意義と利得—」	人文科学研究科

3月2日（月）	FD 勉強会「学生が初習外国語を使って発信することを考える」	初習外国語教育運営委員会
3月6日（金） ～3月9日（月）	FD 勉強会 「脳科学の視点から考える、大学で音楽を学ぶことの意義」	音楽学部
4月～2月	教育の質向上に向けた取り組み－PBL 科目の推進	大学 FD 委員会
4月～3月	教育の質向上に向けた取り組み－大学院の FD 活動	大学 FD 委員会

以上

2025 年度フェリス女学院大学 FD 講演会実施報告

大学 FD 委員会副委員長
教務部長 古内 洋平

日程 2025 年 7 月 30 日（水）15:00～16:00

場所 オンライン（Google Meet）

題目 大学×地域×社会——連携から生まれる新しい学び

対象 本学教職員（非常勤を含む）及び博士後期課程学生

発表内容

・本学における社会連携・地域連携を取り入れた授業の紹介等

登壇者

上原 良子 教授（グローバル教養学部 国際社会学科、国際交流学部 国際交流学科）

藤巻 光浩 教授（グローバル教養学部 文化表現学科、文学部 コミュニケーション学科）

ト部 直也 本学非常勤講師（真鶴町役場 健康こども課長）

ファシリテーター

大学 FD 委員会副委員長 古内 洋平 教授（教務部長）

出席者

専任教員 27 名、非常勤講師 1 名、博士後期課程学生 0 名、職員 24 名

（アーカイブ視聴:2 名 ※視聴者のなかには当日出席者も含む）

講演会の概要

1. 開催にあたって：小檜山 ルイ 大学 FD 委員会委員長（学長）

- 本勉強会は、社会連携をテーマに、授業の中で先進的な取り組みを実践している教員 3 名から事例共有をいただき、本学の今後の社会連携活動の活性化に繋げることを目的に開催する。
- 大学として「開かれたフェリス」を実現するため、社会連携の拡充を進めていきたい。ブランディングの 3 本柱の一つである「社会で生きる実践の機会を提供する」という観点からも、地域連携は重要な施策となる。
- 今回の事例共有を通じて、社会連携への理解を深め、自身の授業で取り入れるきっかけとしてもらいたい。

2. 事例報告：

(1)上原 良子 教授（グローバル教養学部 国際社会学科、国際交流学部 国際交流学科）

連携先：宮代製茶（静岡県沼津市）

連携の経緯

- ゼミ卒業生が、勤務していた銀行を退職し、家業である製茶業を継承することを決意したことがきっかけとなった。ペットボトル飲料の人気による茶葉需要の低迷や、新茶の収穫時期になると売れ残った古い茶葉を廃棄せざるを得ないという深刻な課題を聞き、大学として何か貢献できないかと考え、社会連携の取組推進

の機運が高まったタイミングと重なったことから、連携プロジェクトが始動した。

活動内容

● 当初の目標設定と準備：

当初は「廃棄される茶葉を活用したスイーツ開発」を目標に設定。熱海のお茶関連カフェやスイーツ店を食べ歩くなどの市場調査に加え、熱海の地域創生の起業家からアドバイスを得た。また、ゼミ内で勉強会を開催し、パリ在住者からフランスでの日本茶の流行（カラフルな南部鉄器の鉄瓶が人気であることなど）について学ぶ機会も設けた。

● 学生的心声を反映した目標転換：

プロジェクトの方向性を大きく変えたのは、ゼミで実施した試飲会での学生の率直な意見だった。地元では二流と見なされ人気がなかった「ほうじ茶」が「美味しい」と高評価を得た。また、本格的な急須で淹れるよりも、手軽な「ティーバッグ」への支持が学生、特に中国人留学生から強く示された。これらの声を受け、「廃棄品の活用」という安価なイメージではなく、お茶本来の美味しさを追求する「茶葉の販売」へと目標を転換。学生の視点から見出された「ほうじ茶のティーバッグ」を主力商品として開発することになった。

● 販促の工夫：

商品の背景にあるストーリーを伝えるための手作りのポスターや、サステナブルな和紙を用いたパンフレットを作成した。このパンフレットは現在も活用されている。

また、茶葉単体だけでなく、ボトルやトートバッグ、和菓子との抱き合わせ販売により、売り上げが上がった。

成果と課題

● 販売実績と地域への波及：

学祭では、地元の和菓子などとのセット販売も功を奏し、予想を上回る売れ行きを記録した。連携先が地元でほうじ茶のサンプル配布を続けた結果、徐々に注文が増加し、初年度で茶葉は完売、廃棄ゼロを達成した。この成功は、地元のクラフトジン醸造所でのオリジナルカクテル採用や、「星野リゾート リゾナーレ熱海」でのドリンク展開といった新たな連携にも繋がった。さらに、当初は泉区のローカルテレビのみだったメディア紹介も、静岡のテレビや新聞へと広がりを見せた。

● 今後の課題：

一方で、学祭の販売スタッフとして参加する学生が少なく、授業外での活動への参加意欲は高くないことが顕著であり、これにどう対応し、学生を巻き込んでいくかが大きな課題として残った。また、連携先の本来の目標を見失わないこと、学生のトレンドを捉えることが重要であることを再認識した。

(2) 藤巻 光浩 教授 (グローバル教養学部 文化表現学科、文学部 コミュニケーシ

連携先：シネマ・ジャック & ベティ（横浜市中区黄金町）

連携の経緯

連携先は、コロナ禍の影響で 2023 年に閉館の危機に直面し、クラウドファンディングによって再建されたミニシアターである。藤巻先生自身が劇場の常連客であったことから、支配人との立ち話の中で「大学と連携して劇場を盛り上げられないか」という相談を受け、協力が始まった。

連携の背景にある課題—「映画の多様性の危機」

本プロジェクトの背景には、映画業界が抱える構造的な問題がある。

1. **視聴習慣の変化:** コロナ禍を経て、映像作品をスマートフォンやサブスクリプションサービスで視聴するスタイルが定着。要約だけを見る「ファストシネマ」も広がっている。
2. **興行収入の偏り:** 『ミッション：インポッシブル』シリーズのような一部の「売れ線」映画が、全興行成績の約 85%を占めている。これにより、志のある作家が制作した多様な作品が観客に届きにくくなり、映画文化全体の多様性が失われる危機にある。

活動内容—観客のリテラシー向上を目指して

この「映画の多様性の危機」に対し、藤巻先生の専門であるカルチュラル・スタディーズの視点から、「観客（オーディエンス）のリテラシーを上げる」ことを目標に設定。難解な作品や多様な表現を深く味わうための手助けとして、トークショーを月に一度開催している。このトークショー実施に先立って、母体となるプロジェクトをフレンドリーグループで立ち上げた。

● トークショーの運営:

作品選定は、主に女性監督の作品や、ジェンダーをテーマにした作品を中心に行う。一つの作品に対し、ゼミ 4 回分の時間を費やして準備する。関連文献の輪読やディスカッションに加え、学生は作品に対する「批評」を執筆する。この批評をゼミ内で共有・議論し、トークショーで話す内容を練り上げていく。また、広報用のチラシ作成や SNS での発信も学生が担当する。

成果と課題

● 成果:

活動開始から 1 年が経過し、徐々にプレゼンスを確立。トークショーを鑑賞した高校教員から声をかけられる機会が増え、SNS でも好意的な評価を得ていることが学生の励みになっている。

● 課題:

1. **スケジュール調整:** 劇場の変則的な上映スケジュールと、大学のゼミ日程の調整が困難である。
2. **学生の関心の偏り:** 藤巻先生が重視する「批評の執筆」よりも、学生の関心がイベントの運営管理（マネジメント）に偏りがちである。
3. **学生の意識:** そもそも学生自身が「売れ線映画」を好み、ミニシアターで多様な作品を鑑賞することへの関

心が薄いという根本的な課題も存在する。

(3) ト部 直也 本学非常勤講師（真鶴町役場 健康こども課長）

連携先：真鶴町役場（神奈川県足柄下郡）

連携の概要

- ト部先生が担当する授業「情報とメディアのリテラシー」では、地方・地域を題材に、ソーシャルデザインの手法を実践することでメディアのリテラシーの習得を目指している。授業は、講義で得た知識をワークで確認するというサイクルで展開される。
- 2024 年度は、東京大学や内閣府などが後援するアイデアコンテスト「チャレンジ！！オープンガバナンス（COG）」への応募を目標に設定。真鶴町の職員として「真鶴で子供が元気に育つために必要な環境とは何か？」「真鶴の若い世代が地域とつながる暮らしとは何か」というテーマを設定し、フェリスの非常勤講師として、授業でこのテーマに対して解決策を探っていくという形でプロジェクトが進められた。

3つの立場を活用した学びの提供

本プロジェクトにおいて、ト部先生は自身が持つ「大学の非常勤講師」「地元行政職員」「町民」という3つの立場を最大限に活用。講師としてソーシャルデザインの理論を教え、行政職員としてリアルな課題や現場の動きを伝え、町民として学生と地域住民や必要な専門家（エンジニアなど）をつなぐ役割を担った。

活動内容と成果

- **課題把握とアイデア創出：**
学生たちは、統計データ分析に加え、真鶴町でのフィールドワークを実施。当事者へのヒアリングを通じて課題を「自分ごと化」し、情報を整理・分析した。その中から「街のために活動したいが、何をすればいいかわからない」という課題に取り組むグループも出てきた。
- **プロトタイピングとコンテスト応募：**
解決策として、地域活動のマッチングを目的とした地域通貨アプリ「マナレージ」を考案。単なる企画書に留めず、ト部先生の人脈を通じてエンジニア等の専門家の協力を得て、実際に動作するプロトタイプを制作。「形にする面白さ」を学生が体験できる機会を創出した。
- **成果：**
この提案は COG コンテストで高く評価され、学生チームはファイナリストとして「金賞」を受賞。さらに、本学の GIS 研究会のチームもポスターセッションで「金賞」を受賞し、「ダブル金賞」という快挙を成し遂げた。

教育的意義と地域へのインパクト

- 本授業の狙いは、実践を通じて「自分が何を理解できていないか」を学生自身がリアルに確認し、真のリテラシーを習得することにある。
- また、日本のローカルな課題解決モデルは、将来的に世界の課題解決にも繋がらうという視点も学生に提供。卒業後も町の祭りに参加したり、HP 制作のデザイナーとして地域に貢献したり、大学卒業後に真鶴町の

企業に就職するなど、持続的な関係の構築・創出に繋がっている。さらに、学生たちの活動が地元の若者にも刺激を与え、新たな地域活動が生まれるといった相乗効果も報告された。

3. 質疑応答

質問：（上原教授、藤巻教授へ）

社会連携活動における「個別具体的な課題解決」と、大学教育が目指す「一般化・普遍化」をどのように接続し、研究や教育に還元していくべきか。また、そのために大学にはどのようなサポート体制が求められるのでしょうか？

回答：

（藤巻）連携先であるミニシアターの直接的な業績回復（売上向上）に貢献することは、自身の専門外であり、直接の目標とはしていない。大学としての役割は、映画という芸術を解釈し批評する力を学生が身につけることで、映画という芸術作品の価値を高められたら良いと考えている。連携先とは「お互いの目標は異なる」ということを明示し、大学はあくまで教育的な目標を追求している。

（上原）現代の教育は、単なる知識習得から「答えのない課題の解決型」へと劇的に変化している。社会連携活動は、身近な個別の事象が、いかにグローバルな社会・経済の動きと連動しているかを学生が学ぶ絶好の機会となる。リアルな社会課題に直面することで、知識が立体的になる。必ずしも課題解決という最終到達点に至らなくても、そのプロセスの中で学生が得る「気づき」自体に、非常に大きな教育的価値がある。

質問：（卜部非常勤講師へ）

連携相手となる企業や自治体は、学生に対して「若者ならではの視点」を期待しがちである。その結果、学生が「期待される役割」を過剰に演じてしまい、客観的な分析の妨げになるという懸念はないでしょうか？

回答：

（卜部）課題解決という成果に至らなくても、学生が第三者の視点で地域を丁寧に調査し、事実を掘り起こす作業自体が、地域にとって非常に価値がある。過去の事例では、学生が調査を通じて、地域住民も気づいていなかった地場産業の価値や、忘れられていた地域の歴史（井戸のコミュニティなど）を再発見した。その報告を聞いた住民が自らの町に誇りを持つなど、新たな住民同士の繋がりが生まれるきっかけにもなった。最終的なアイデア創出は「おまけ」のようなものであり、まずは丁寧な現状把握と事実の発見に注力することが、学生にとっても地域にとっても有意義な活動になると考えている。

4. まとめと今後の展望：

閉会挨拶：小檜山 ルイ大学 FD 委員会委員長（学長）

3名の報告を受け、学内で多様な社会連携がすでに行われていることが改めて認識できた。一方で、それらの情報が学内で十分に共有・発信されていない課題も浮き彫りになった。今後は、大学としてこれらの情報を一元的に集約し、効果的に発信する仕組みが必要である。将来的には、連携先の開拓や教員とのマッチング、予算配分などを担う「社会連携室」のような専門部署の設置も検討課題としたい。

今後の展望に関する提案：上原 良子 教授（事業推進担当副学長）

今後の本学における社会連携活動をさらに活性化させるため、以下の点が提案された。

● 「社会連携」の広義な捉え方：

社会連携は「企業と連携して収益を上げる」といった狭い意味に限定されるものではない。他大学の事例を見ても、オープンキャンパス、ボランティア、自治体連携、実務家による講義など、大学外で行う活動を含んでいるところもある。本学で既に行われている多くの教育・研究活動も、社会連携として捉え直し、発展させることが可能である。

● 本学の特色を活かした連携の方向性：

1. **社会・地域問題の解決への貢献：**企業連携だけでなく、本学の知見を活かした社会貢献も柱となる。移民問題や環境問題など、既存の授業や研究を発展させる形で、横浜やその他の自治体、NGO 等との連携を推進する。
2. **社会でのリアルな学びの推進：**本学の特色の一つである人文・芸術系の学びを活かし、横浜という立地を最大限に活用する。例えば、地域の美術館、劇場、コンサートホール等での体験学習を「社会連携」として体系化する。

● 大学に求められる支援体制：

これらの活動を推進するためには、個々の教員の意欲や教員の個人的な負担が発生する現状を改善する必要がある。

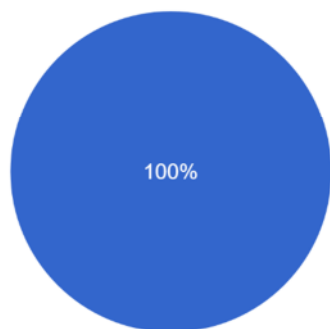
1. **連携の主体：**個別のゼミ単位だけでなく、複数のゼミや教員が参加する「プロジェクト型」での実施も有効である。また、必ずしも形式的な協定を結ぶ必要はなく、専門家を招聘するセミナーなども柔軟な連携の形として考えられる。
2. **予算措置：**教員が自腹で負担していることが多く、資料作成の材料費、外部会場費、学生の施設入場料などを大学が支援する仕組みを整備することが急務である。
3. **交渉・調整のサポート：**外部団体との交渉や調整をサポートする専門部署があれば、教員の負担を大幅に軽減できる。
4. **成果発表・交流の場の設定：**大学祭などを活用し、社会連携活動の成果を共有・発表できる公式な機会（例：「社会連携発表教室」）を設けることで、活動の可視化と学生のモチベーション向上に繋がる。

発表内容についての評価／勉強会全体の長さ／開催時期・時間

発表内容についての評価

発表①（上原 良子先生）の内容について

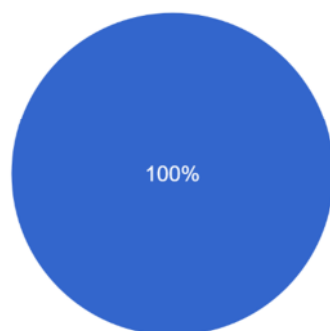
18 件の回答



- 参考になった
- どちらとも言えない
- 参考にならなかった

発表②（藤巻 光浩先生）の内容について

18 件の回答



- 参考になった
- どちらとも言えない
- 参考にならなかった

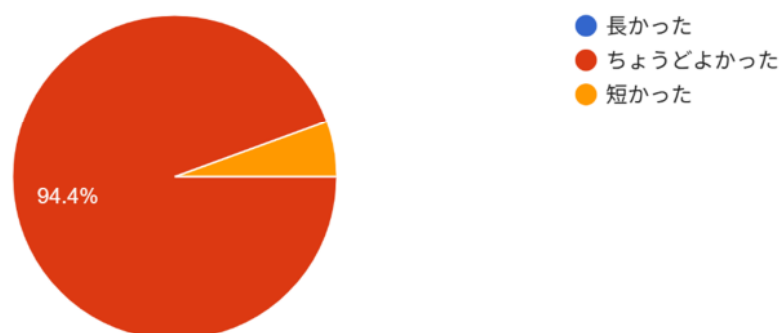
発表③（卜部 直也先生）の内容について

18 件の回答



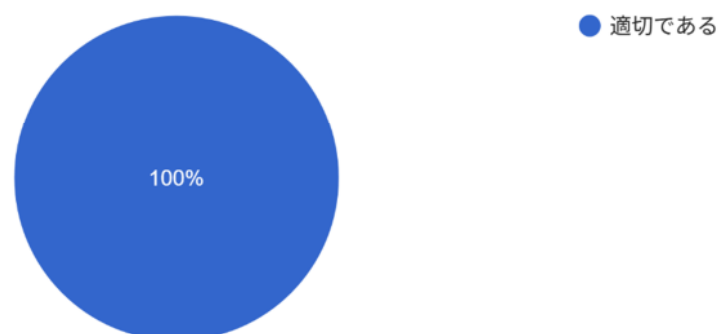
本勉強会全体の長さ

18 件の回答



本勉強会の開催時期・時間（適切でない場合は、「...に具体的な時期・時間帯を記入してください。）

18 件の回答



発表についての感想

上原 良子 教授

- 素晴らしい取り組みのご紹介を本当にありがとうございました。やはり、卒業生とのつながりは大きいものがあるなと改めて感じました。
- 素晴らしい取り組みで、楽しそうなゼミだなと感じました。
- ゼミでは本を読ませて、レジュメを作成して発表させて...というような従来型のことしかやれていませんが、上原先生のようにフットワーク軽く、大学を飛び出すゼミは大人が聞いても楽しそうだと感じました。ただ、現実問題として熱海に行くまでの運賃とか、そういうものも学生自腹となると、そういうことを計画すること自体悩んでしまいます。"
- ご発表ありがとうございました。関係者も多く、スケールの大きなお話で圧倒されましたが、とても面白そうだと感じ、大変勉強になりました。実はすでに多くのクラスで社会連携をしているというお話で、日本語教育関連でも同様の感覚があると思いました。現状としては、フェリス生は参加者として関与することが多いので、多様な参加のし方についてもう少し検討する必要があると感じました。
- 社会連携に繋がるように職員でも常にアンテナを張っていることは必要だと感じた。
- PBL 科目であるけれど、実際には学生の巻き込みが難しい、というリアリティを共有していただけたのがよかった。
- 横浜日仏協会や宮代製茶様（卒業生）など、身近で双方にメリットある連携先であること、入学者の気質や志向を踏まえると従来型の講義形式、座学だけでは通用しづらくなっていること、高校でも他大学でも、すでに社会連携は「当たり前」であること、企業連携（との商品開発）に限らず、人文系学部にとって親和性の高い機関（自治体や財団？）との連携は、学生の学びの場を教室外に拡張するうえで有用であり、学生も求めていること等をご紹介いただきました。実践女子大学では「学生の行動の総量を増やす」ことを組織的な目標とし、全学的に社会連携を推進されていますし、関東学院大学では特に経営学部が先行して成功（募集への好影響）を導いています。本学ではまだ「座学の方に価値」を置くタイプの先生方が多いように感じますが、「知識の活用」（アウトプット）による定着、「身体化」（実際に使えること）や隣接領域への関心拡大など成長への効能が大きいこと、どの学科、専攻、どのゼミでも社会との接続を実感できる環境が理想だと思います。
- 最後の「副学長」スライドについては、もちろん実現していただきたいところですが、より実効的な学生と教員のモチベーション向上を引き出すために参考となるのが、横浜国立大学の地域連携推進機構の取り組みです。主な特徴としては、地域連携の統合的な見える化（組織化された教員陣や全連携先について HP や成果報告書で明示）と「地域課題実習」による活動の授業単位化（副専攻の一つとして地域連携を位置づける）です。<https://www.chiiki.ynu.ac.jp/about/index.html>
私が以前から提案しているこの「単位化」のほうでは、クラブ・サークル活動に関しても「地域」がテーマであれば算入が可能である点で、団体加入率が下がり、就活時の「ガクチカ」が希薄化する現状への一対策として、さまざまなクラブ・サークルの再活性化にも寄与できると思うのです。事例として：<https://www.chiiki.ynu.ac.jp/map/000478.html> どうかご検討をよろしくお願いいたします。

藤巻 光浩 教授

- 先生個人のご興味でもあることが、ゼミ等での教育にうまく結びついていかれる様子や、課題についてもうかがえて、非常に参考になりました。

- 大変素晴らしい取り組みだと感じました。が、ゼミで学外で何かをしようとする、やはり教員も学生も通常のゼミ時間以外に休日返上になってしまうことが躊躇してしまう原因だと思いました。そこに学生がついてくるのか、休日返上になってもついてくる学生がいるのかどうか、そのハードルがとても高いように感じました。
- ご発表ありがとうございました。開かれた学びのあるゼミで素晴らしいと感じました。質疑応答で、教員側の目標を設定するというお話を伺い、大変勉強になりました。連携するということで、同じゴールを設定することに苦慮していましたが、それぞれのゴールをもって共に取り組むということは非常に健全であると感じました。
- こちらも、学生指導面での課題について教えていただけたのがよかった。また、こうしたゼミでの PBL の取り組みが各自の卒業研究にどのようにつながっているか（つながっていきそうか）という点についても、うかがいたかった。
- 大学側・教員側が一定程度の主導権を握ること（目標設定等において）の重要性が理解できました。また、学生がマネジメントばかりにとらわれてしまうという点にとっても共感しました。
- 学生の参加度の凸凹や劇場（配給会社）の業績回復に直結しているわけではないこと等率直に語っていただき、そもそも「課題解決」がゴールではなく、メディア研究ゼミとして作品批評の視点（トークショーの運営だけではなく）を学生に備えてもらう過程に価値があると理解しました。解釈、批評する力 芸術の価値を高めることができればいい。健全な解釈共同体があることによって多様な映画表現が担保される。そのような学生を社会に送り出すのも大学の使命である。

古内先生からのご質問は研究・学問への還元を問うもので、フェリスの大半の先生方はこちら（研究にどう役に立つのか？）側のように思います。視点（重視されるポイント）が学生の成長なのか、研究の高度化なのかによって先生方の（時間配分）が変わるのだと想像しますが、思考力を鍛え、成長してもらわないと学問の追求も進まないし、課題は生ものなので、取り組んだ結果、どうメリット（見返り）があるのかは（それこそ）不確実なことと思います。この問いへの答えは、発表③ト部先生からも得られました。

ト部 直也 非常勤講師

- ご紹介の内容は、うまくフェリス生を導いたり、サポートしたりしてくださった成果だと強く感じます。
- PBL の実際のお話を聞くことができてよかったです。ありがとうございました。
- ご発表ありがとうございました。一つのクラスから地方創生にこのように関わることができると知り、感動しました。
- 「ソーシャル・デザイン」という考え方について、今までぼんやりとしたイメージしか持てていなかったの、今回実践をうかがって大変勉強になりました。
- アウトプットして形にする楽しさを味わってもらうこと、丁寧に調査して課題を把握し、事実をあぶりだしていくことだけでも連携先（地域）は十分満足であり、経験値になるとのこと、勇気づけられるご発言がありました。学生の「地域再生に興味がないわけではないが、参加の仕方がわからない」という需要や「関わるのはいいが、リターンもほしい」という本音に応えるものだった。

発表事例はたまたまテーマが若者と地域がどう繋がるかだったので、デザイン思考、当事者思考の目線にはまった。若者が消費されたり、若者ならではの目線（期待）に応えねばという不自然さなどは本質的な問題ではなさそう（そういう場面が皆無ではないかもしれないが、「やらない理由にはならない」というメッセージだと感じました。

「丁寧に調査して、事実をあぶりだす」ことによって、町民の方が驚いたり、地域に誇りを持ったり、町民

どうして新たな繋がりや愛着が生まれる。新しい事実だけでも十分意義深い。そのうえアイデアがあればめっけもん、という言葉は「まずはやってみなさい」という励ましだと受け止めました。

発表及び勉強会全体に関する感想／今後扱いたいテーマ、ご要望

発表及び勉強会全体に関する感想

- 多彩な社会連携方法があることが分かりました。結果よりもプロセスが大事ということを再認識することができ、良かったです。
- とても興味深い勉強会でした。自分が関係しているフィールドや地域課題を授業とどう結び付けられるか考えていたので、お三方のとり組み大変勉強になりました。最後にまとめていただいた社会連携の捉え方、本学での PBL 授業の位置づけや活動なども含め、今後も学びながらぜひ取り組んでいきたいと思いました。ありがとうございました！
- 学生募集の観点からも社会連携の充実は大きなテーマになると思うので、取り上げられるようなテーマがないかアンテナを張っていたと思った。
- いずれの先生方のご報告も素晴らしかったです。実践するうえでの課題を共有していただいた点が、特に勉強になりました。また、古内先生の質問が大変素晴らしく、これまでの FD 勉強会にはなかった、アカデミックな深まりを感じました。
- 2013 年度にも、(プロジェクト演習は) 小さな取組みからでいい、人文系女子でもできるという FD 勉強会を実施しました。とても正直な感想としては、多くの先生方は 12 年前と大きくは変わっていない(が高校や社会は変化したので、そのズレが志願者減にも表れているのでは) と思いました。
社会連携は死活的に重要であり「支える部署がないから」「負担増だから」と敬遠していると、高校生は探求学習(や情報Ⅰなどで社会とデザインという概念を学ぶので)を経験して、大学では社会との接続を期待するので、社会連携も PBL も見えにくい大学はますます選ばれなくなるのではないのでしょうか。
- 学内で外部連携を取り入れたさまざまな授業が展開されていることがわかる。非常勤教員も含め、各教員がそれぞれ個別に実施しており、横のつながりが乏しいことが課題である。大学全体としてどのように外部連携を活かすのか考える必要があるし、それにあたっては、外部連携はそのものが目的なのではなく、教育の充実、就職に結びつく学び、などの本来の目的を見失うことがないように留意してほしい。また、選択科目ではなく必修のゼミにおける外部連携活動の実施が専門分野の学問と結びついた高度な学びと言えるのかは、改めて検討する必要があるだろう。(例として、藤巻ゼミの活動は、メディア批評を前提にしているので十分に学問的な取り組みであるように思えた。)
- 正課授業における社会・地域との連携を促進していくにあたり、職員としてはこれまでシラバス上の表面的な記述から授業内容を想像することしかできませんでした。しかし、今回先生方から直接授業内容や社会・地域との連携について伺うことで、具体的にどのような取り組みが行われているのかを知ることができ、大変参考になりました。

今後扱いたいテーマ、ご要望

- 上原先生の最後のご提案のように、複数のゼミで合同で何かが行うということは、グローバル教養学部になったからこそ出来そうな気がしています。2027 年度から 3 年専門ゼミが始まるにあたり、ぜひ学科のいくつかのゼミ合同で横浜を舞台に何かを作り上げることをしたいと思いました。そのために必要な交通費や場所代などの大学予算をつけてもらうこと抜きには実現できないように思います。これも立派な PBL であると

知りました。ありがとうございました。

- FD 活動についての提案ではないのですが、今日のような内容こそ、学外向けのイベントのような形で発信してもよいのではないかと思いました。タイアップ先の方々もお呼びして、シンポジウムのようにするなど、実現可能性が高そうに思いました。
- 高校の先生方からは「大学の先生は、高校（の学習指導要領の変化など）をあまりご存じない」との声を聞きます。高校だけでなく、本学の「実就職率」が女子大の中でも実は長期にわたり「劣位」であること、採用直結型インターンシップ導入後、出口で要求される在学中の経験やスキルはどう変化したのか、高い実就職率を達成（維持）している女子大は何を実行しているのかなど、キャリア支援課と共催で、データを確認しながら体系的に学べると有難く存じます。現状では、教授会で「前年度の比較の内定率」報告と「まだキャリア支援課に報告していない学生には、先生方から促してください」とアナウンスされるのみで、「キャリア教育」＝「キャリア教育担当の非常勤と、キャリア支援課の仕事」と（他人事のように）切り離されているように見えるためです。

以上

2025 年度フェリス女学院大学 FD 講演会実施報告

全学教育担当副学長

杉之原 真子

日程 2025 年 10 月 29 日（水）11:00～12:00

場所 対面（2301 教室）、オンライン（Google Meet）

題目 大学教育における生成 AI の活用：可能性と課題

対象 本学教職員（非常勤を含む）及び博士後期課程学生

発表内容

- ・ 大学教育における AI リテラシー・生成 AI の活用：可能性と課題 等

登壇者

遠藤 健太 准教授（グローバル教養学部 文化表現学科、国際交流学部 国際交流学科）

竹野 真帆 准教授（グローバル教養学部 心理コミュニケーション学科、文学部 コミュニケーション学科）

ファシリテーター

杉之原 真子 教授（グローバル教養学部 国際社会学科、国際交流学部 国際交流学科）

出席者

専任教員 25 名、非常勤講師 1 名、博士後期課程学生 1 名、職員 26 名

（アーカイブ視聴:22 回 ※視聴者のなかには当日出席者も含む）

講演会の概要

1. 開催にあたって: 杉之原 真子 教授（グローバル教養学部 国際社会学科、国際交流学部 国際交流学科）

- 本勉強会は、生成 AI をテーマに、実際に AI を教育に積極的に活用されている教員 2 名から、主にレポート等の作成にかかわる具体的な使用方法や、教育上の効果、問題点や課題についてお話いただき、AI 時代の学びや教育のあり方を考えることを目的に開催する。

2. 話題提供:

(1) 遠藤 健太 准教授（グローバル教養学部 文化表現学科、国際交流学部 国際交流学科）

① AI 時代に必要となる「そもそも論」

高度な AI が普及する現代において、教育現場は「AI に頼ると思考力が損なわれるのでは」といった様々な問いに直面し、混乱している。このような時こそ、以下の根本的な問いに立ち返る必要がある。

- AI 時代において、私たち人間はどのような力を身につけるべきか。
- 学生がその力を身につけるため、どのような教育が必要か。
- その教育を実践するため、教職員はどのような知識・技能・態度を身につけるべきか。

② AI リテラシー/コンピテンシーに関する先行研究とその課題

AI の影響下で生き抜くために必要な知識・スキル・態度の総称である「AI リテラシー（コンピテンシー）」について、主要な先行研究（ユネスコ、OECD 等）が紹介された。

- ユネスコ『AI コンピテンシー・フレームワーク：学習者向け』：①AI に対する批判的アプローチ、②人間中心主義、③環境の持続可能性、④包摂性を基本原則とし、単なる生産性向上スキルとは一線を画す。
- 欧州委員会&OECD『AI 時代に学習者の力を育む；初等中等教育向け AI リテラシー・フレームワーク』：「知識」「技能」「態度」の3つに分類し、特に「態度」を重視している点が興味深い。

これらのフレームワークは重要である一方、「構造が複雑で使いにくい」「分類に重複や整理の甘さが見られる」といった課題もあると感じている。

③ 本学向けの実用的な AI リテラシー・フレームワーク（案）

先行研究を踏まえ、学内での実用性を意識した独自のフレームワーク（叩き台）が提示された。

- 分類：「知識」「技能」「態度」の3つに分類（OECD を踏襲）。

★ 本学向けの実用的な整理（案）

身につけるべきチカラ			対応すべき社会課題
知識	技能	態度	
【AI利用時の初歩的な留意点】 - 誤情報 - 情報漏洩 - 著作権・プライバシー侵害 - バイアス - 環境負荷	【実践的なAI活用スキル】 - ツールの操作 - プロンプト - モデルやツールの選択・併用 - (パイプ)コーディング - アプリやシステムの構築	- 責任感 - 探究心 - 未来志向 - 適応力 - 共感力	- AIによる環境負荷の増大 - AIのバイアスに起因する偏見・差別の助長（人種・ジェンダー等） - AIアクセス機会の差による格差の拡大（地域・言語・世代等） - 生成AIを前提とする著作権等の法解釈 - 政治・経済・国際関係・安全保障等への影響 - 文学・音楽・芸術等への影響 など
【AI技術・ツールに関する知識】（基礎知識+最新情報） - AIのしくみ、用語や概念 - AIの能力と限界、人間との違い - モデル学習やデータの性質 - モデルやツールの性能や特徴 - 最新動向、今後の展望	【より本質的なスキル】 - 批判的思考（+ファクトチェック） - コミュニケーション - コラボレーション - クリエイティビティ - プログラミング的思考（計算論的思考）	- 人間中心主義 - シティズンシップ	

（出典：遠藤先生 発表資料 P.19）

④ 【実践例】AI を活用したファクトチェック指導

本質的スキル（批判的思考）を養うための実践例として、ゼミ指導における AI を活用したファクトチェックの事例が2点紹介された。

事例1：メキシコの貧富の格差

- 学生の記述：「メキシコはラテンアメリカの中で貧富の格差が最も大きい国の一つ」（真偽不明なネット記事がソース）
- AI の活用：AI（ChatGPT）に「調べ方」を相談させ、信頼できる情報源（世界銀行のジニ係数データベース）にたどり着くよう指導。英語のデータベースの操作方法も、AI にスクリーンショットを見せなが

ら対話形式で学ばせた。

- **結 果:** 学生は一次情報に自ら触れ、「メキシコの格差は相対的に大きくない」という事実にとどつき、当初の主張が事実誤認であったことを自ら確認できた。

事例 2:「世界寄付額ランキング」

- **学生の発言:** 「日本は世界寄付額ランキングで 141 位」(真偽不明な SNS 投稿がソース)
- **AI の活用:** AI (ChatGPT) に「調べ方」を相談させ、信頼できる情報源 (CAF "World Giving Index") を示してもらい、最新の報告書の PDF (英語・長文) を AI に読み込ませた。
- **結 果:**
 1. AI に「日本は 142 か国中 141 位」の記述箇所を引用させ、学生自身が PDF の該当箇所を読んで事実を確認。
 2. さらに、AI の指摘(「寄付額だけではない」)を受け、指標の定義が書かれた箇所(4 ページ)も確認。「お金の寄付」「ボランティア」「見知らぬ人を助けた」の 3 項目からなることを理解。
 3. 「世界寄付指数」という一般的な訳の不正確さに気づき、「世界人助け指数」という専門家の訳語の方が適切であると、学生自身が確信を持って判断できるようになった。

⑤ 結論: AI 時代に価値を持つ「自分の言葉」

- AI 時代において価値があるのは、「自分が腹落ちするまで自分の目で確認した」という確信から来る「自分の言葉」である。
- 「AI を使いこなしているが、最終アウトプットがちゃんと自分の言葉になっているか」は、文章や話を聞けばわかる。
- 自分の言葉にできることの重要性を、教員が人間的な情熱(パッション)を持って学生に伝えることが重要である。

(2) 竹野 真帆 准教授 (グローバル教養学部 心理コミュニケーション学科、文学部 コミュニケーション学科)

① 原則:「要約」から「整形・展開」へ

AI の活用原則として、以下の 4 点が挙げられた。

1. **AI の本質理解:** AI は「平均化のマシン」であり、単純な要約は誤読や凡庸化を招くため避ける。
2. **読む(構造化抽出):** AI への依頼を「要約」ではなく、構造化して「根拠付き抽出」に限定する。
3. **書く(展開と整形):** 「下書き (AI) → 出典確認 (人間) → 改稿 (AI+人間)」の順で進める。
4. **評価(根拠重視):** 成果物の流暢さではなく、「根拠の指差し」と再現可能性を重視して評価する。

② AI で「読む」実践: 構造化抽出 (5 ステップ)

AI に論文を要約させるのではなく、情報を「構造化して抽出」させる具体的な手法が紹介された。

- **ステップ 1: メタ情報固定** 論文のタイトル、著者、DOI などのメタ情報を AI に認識させ、分析対象の論文を固定する。これにより、AI が他の論文と混同したり、架空の情報を生成したりすることを防ぐ。
- **ステップ 2: 構造化抽出** 「この論文を要約して」と依頼するのではなく、「研究課題(RQ)」「データ/対象」

「手法」「主要結果」「限界」「出典」といった指定の6項目で表を作成するよう指示する。

- **ステップ3：原文引用** AIが抽出した各項目、特に「主要結果」について、必ず原文の該当箇所をページ番号と共にそのまま引用させる。
- **ステップ4：統合（人間による要約）** AIが構造化した表（原文引用）を見ながら、最終的な「主張・根拠・限界」の要約は、学生（人間）が自身の言葉で行う。学生自身の理解を深める重要なステップ。
- **ステップ5：複数論文の統合** この構造化されたフォーマットを複数の論文で作成することで、先行研究の比較検討（文献レビュー）が容易になる。

③ AIで「書く」実践：下書き・出典確認・改稿（3ステップ）

文章作成プロセスを3段階に分け、AIと人間の役割を明確化する手法が示された。

- **ステップ1：下書き（AI）** 自分の考えをAIに与えた上で、AIに下書きを作成させる。この際、参考文献を提示することは有効だが、AIが提示する文献はあくまで「候補」として扱う。
- **ステップ2：出典確認（人間）**
（最重要） AIが作成した下書きに含まれる参考文献が実在するか、DOIや書籍情報を基に人間が必ず確認する。AIは架空の文献を生成することがあるため、この検証が不可欠である。また、本文の記述（数値データ等）と引用元文献との整合性も確認する。
- **ステップ3：改稿（AI＋人間）** 出典確認の結果に基づき、「この文献は存在しないため削除」「この記述は文献と一致しないため修正」など、具体的な根拠を示してAIに修正を指示し、文章の精度を高めていく。

④ 評価基準の転換：「根拠の指差し」の重視

AIの活用を前提とした場合、従来の「要約の出来栄え」では学生の能力を測定できない。そのため、評価基準を以下のように転換する必要がある。

1. **構成：** 論理構成が適切か。
2. **根拠：** 主張を支える根拠（参考文献）が実在し、正確に引用されているか（＝根拠の指差しができているか）。
3. **解説：** 引用した内容を、学生自身の言葉で理解し説明できているか。
4. **開示：** AIの使用を適切に申告しているか。

⑤ AI使用の「開示（申告）」の義務化

評価の透明性・再現性を担保するため、学生にはAIの使用申告を義務化する。申告には以下の4点を含めることを求める。

- **使用目的：** （例：構造化抽出、下書き作成など）
- **採用箇所：** （例：第2段落、図表の説明文など）
- **検証方法：** （例：出典を原文で確認し、不正確な部分を修正したなど）
- **主要プロンプト：** （使用した指示内容）

これは、卒論や卒制においても同様であり、AIが補助できる「整形」や「構造化」の部分と、学生が責任を持つべき「研究設計」や「データ分析」「結果の解釈」とを明確に区別し、アイデア出しの部分は学生自身が独自性をもって考えることが重要である。

3. 質疑応答

【質問】 レポート作成に AI を使用した際、学生に「どのように使ったか」を申告させるとのことだが、具体的な申告方法と運用について伺いたい。

【回答】

（竹野）レポート本体とは別に、使用したプロンプト（指示文）を Google Classroom などにコピー＆ペーストで別途提出させている。コピー＆ペーストなので、学生の負担にはなっていないと感じている。

【質問】（補足質問）「プロンプトを貼る」とは、AI とのやり取り全体ではなく、「自分の指示（プロンプト）のみ」をコピー＆ペーストするという理解でよいか。また、学生が、使用したプロンプトを隠さず、正直に全て提出しているか（こっそり使った分を隠していないか）を見分けることは可能か。

【回答】

（竹野）（指示のみの提出かについては、その通りである。）学生が正直に申告しているかについては、「スクリーンショットでの提出を指示しているので、提出されたものが全てと認識している。今後、長いプロンプトになった場合は、ChatGPT などは共有機能を使わせることも検討している。

【質問】 AI の利用において、「効率化」と「個性の尊重」の間にジレンマを感じる。特に人文系の課題では、AI を使うと学生の「個性」が失われ、文章が「均質化」してしまうのではないか。この「個性の問題」をどう扱うべきか。

【回答】

（竹野）AI は使えば使うほど利用者のスタイルを学習する。学生が AI と対話を繰り返し、フィードバックを与える（＝AI を「育てる」）ことで、AI は学生自身の価値観を反映した、オリジナリティのある文章を生成するようになる。

（遠藤）AI を使わずに書く訓練として、まずは自力で書く「筋力」を鍛えることが、思考力や個性を保つために必須である。また、AI の出力をチェックする訓練として、AI が生成したものを厳しくチェックし、修正する過程で「自分の味（個性）」を出すことも必要である。

【質問】（竹野先生へ） 卒論指導において、AI をアイデア出しに使うのではなく、学生自身が考えるべきとしているのはなぜか。

【回答】

（竹野）AI は既存の情報を組み合わせる提案はできるが、「パンとあんこを組み合わせる（＝あんぱんを作る）」ような、全く新しい発明や面白いアイデアを生み出すことは苦手であるため。論文の構造化や問題点の洗い出しまでは AI に任せても良いが、最終的な「論文の核となるアイデア（テーマ）」は、学生自身が考えた方が、より新しく面白いものが生まれると考える。

【質問】（竹野先生・遠藤先生へ） AI との対話や壁打ちは、学生の（授業などに対する）「理解」を促進するのか、それとも逆に薄めてしまうのか。

【回答】

（遠藤・竹野）（両名とも）ものすごく良いこと（促進する）と考える。

（竹野）感想や解釈を AI に丸投げさせるのは良くないが、「私はこう思うが、君（AI）はどう思うか？」という壁打ちや対話をさせることは、学生が自分の考えを「言語化」する訓練になり、思考が深まる。また、人間（教員や親）が省略しがちな説明を、AI は噛み砕いて、学生が納得するまで繰り返し説明してくれる。この「納得するまで対話する」プロセスを人間と行うと時間がかかるが、AI 相手なら短時間で済むため、学修効率の向上（時短）にも繋がる。

【質問】（竹野先生へ） AI は毎回違う回答をする可能性があるが、学生からプロンプトの提示を受けたとして、第三者が回答の「再現可能性」を検証することは可能なのか。

【回答】

（竹野）全く同じものを再現するのは難しいのは事実である。しかし、同じ（ような）プロンプトを繰り返せば「似たようなもの」「ほぼほぼ同じもの」は生成される傾向があるため、それをもって（ある程度の）再現は可能だと認識している。

【質問】（竹野先生へ） AI を使用したレポートの評価において、学生の理解度を測るために「口頭試問」は必要になるか。

【回答】

（竹野）口頭試問の目的は、あくまで「学生がその内容を（AI を使ったかどうかに関わらず）きちんと理解しているか」をチェックすることである。したがって、AI 利用とは切り離れた問題として、学生の理解度を確認するために必要であれば実施すべきだと認識している。

4. まとめと今後の展望：

杉之原 真子 教授（グローバル教養学部 国際社会学科、国際交流学部 国際交流学科）

現在、大学としては、学生および教職員に対して生成 AI の使用等に関するガイドライン作成が必要な状況である。今回の勉強会の内容も踏まえ、引き続き様々な形で検討していきたい。

勉強会全体

勉強会全体について
15 件の回答



発表についての感想

遠藤 健太 准教授

- 実例をあげてご説明くださり、大変わかりやすく、なるほど、と思いました。
- 本学で学生が AI を使用する上での具体的な枠組み案をかみ砕いて説明していただき、大変参考になりました。
- 本学向けの実用的な活用方法が整理されていて、イメージしやすかった。
- AI を使ったファクトチェックのやり方などとても参考になりました！
- いきなりでは学生にとって難解に思ってしまうような長い報告書や英語の文書についても、ステップを踏んで質問したり、根拠となるページ・箇所を示すようお願いしたりして、学生本人にとっても効率的に必要な情報にたどり着けるように使う方法があることを、具体的に学びました。
- 「そもそも」論と実践の部分、両方とも非常に参考になりました。ありがとうございます。
- ファクトチェックに AI を使う手順を、具体例を挙げながら詳しく説明してくださったので大変参考になりました。
- チェック機能としての使い方など、職員の立場でも活用できるような内容があり、大変ためになりました。思考力が損なわれるのではないかと懸念に対しても、やはり使い方次第のため、学内でのルール化などがとても重要だと感じました。
- ファクトチェックを学生に行わせる具体例が示されていて、とても参考になりました。とくに、学生にチェックさせるポイントが明確で分かりやすかったです。
- 【実践例】AI を使ったファクトチェックの練習がとても役立った。
- AI を使って根拠資料を確認させる指導について大変丁寧にご説明いただきました。真似したいと思いました。
- 全体像がよく理解できました。ありがとうございました。

- 論文を独自にまとめてくださったチャートが、とても参考になりました。ありがとうございました！

竹野 真帆 准教授

- 先生が実際に論文指導でされている状況をうかがえ、大変よくわかりました。
- AI 使用の有無（どこに AI を使用したのか、どのような指示出しをしたのか等）をレポートに記載させるという方法を初めてお聞きし、今後の新しいスタンダードになるように感じました。
- AI に任せるところ、自身で作業するところについて理解を深めることができた。
- 学生の課題評価についての実践的な内容でとても参考になりました！
- AI の限界に気をつけつつ使う・使ってもらう取り組みについて知ることができ、ありがたかったです。やはり、どう使ったか・最終的に本人が理解しながら卒研やレポートをアウトプットしているかは、自分で説明できるかというところになっていくのだなと思っていたのですが、同様のことをおっしゃってくださっていて、深く共感しました。
- 特に、読む、書くの部分に分けて、それぞれ非常にプラクティカルな内容でした。ありがとうございました。
- 生成 AI をどのように使用したかを学生に答えさせること、AI と人間の思考の分担のところも非常に参考になりました。
- 実際の教育の現場での活用法・指導方法に関してのご発表でしたが、職員の立場としても、教員がどのようなことを工夫しているのかなどを知ることができて勉強になりました。
- AI の特性に沿った「構造化抽出＋出典指差し」という方法が興味深かったのと学生が AI を用いて卒論・レポートを作成した際の評価基準が斬新で、とても参考になりました。
- ゼミでの指導方法が大変興味深かった。また、お子さんも AI を使いこなせていることにも驚いた。
- 文献の構造化抽出のお話が大変参考になりました。真似したいと思いました。
- お話を伺って、自分自身の AI リテラシーを高めていく必要があると感じました。
- AI をどう利用したか学生に報告させるというのは、目から鱗の教育法でした。（妥当性を判断する教員の側にはかなりの能力・労力が必要そうで、尊敬しながら聞きました。）ありがとうございました！

発表及び勉強会全体に関する感想／授業における学生の AI 利用の課題・可能性／自身の生成 AI 利用方法・課題／今後扱いたいテーマ、ご要望

発表及び勉強会全体に関する感想

- 正しく使いこなすことが重要だということが理解できました。
- AI を活用した際にその根拠をたどって確認する方法を具体的に提示いただき、大変参考になりました。
- 教員側での AI についての知識を高めていく必要があると思いました。
- 時間配分としては、メリハリがあってよいと思いました。これ以上長くても、間延びします。
- 生成 AI をよく使われるお二人の先生も、その使い方や学生へのアプローチが異なることが分かりました。学内ではお二人と同じように AI を使われている方が多くいると思うので、継続して勉強会ができると思いしました。
- テーマ・時間配分ともにとても良かったと思います。
- 実践例についてご紹介いただいたのがとてもよかった。
- 私自身、AI との付き合いが勉強会を経ると変わってくると感じていますので、今後、授業の取り組みに活か

したり、学生に対しても少しずつこの学びを還元していきたいと考えています。継続的にこのテーマでの勉強会があると大変嬉しいです

- 遠藤先生が論文を独自にまとめてくださったチャートの、最も基本的なところを、早急に学生と共有する必要があると感じました。「AI をどう使ったか」を教員が 100%確認するのが困難な以上（竹野先生のご指導も、学生の申告の信頼が前提）、AI の大まかな特徴を学生が理解していなければ、その学びが無意味になりかねないと思います。

（教員向け）授業において、学生の AI 利用についてどのような課題や可能性を感じているか。

- AI 使用申告書などとても良いご提案だと思いますが、申告しないでレポートなどを提出してくる場合が悩ましいところですね。あと、文章作成能力などについては AI に文章を作ってもらうことへの懸念点がありますね（語学の課題なども含む）。
- 学生が卒研で扱いたい、自分が多くの先行研究を知っているわけではないトピックについて、主要文献を探したりレビューしてくれたりする AI を使っています。これを参考に、どの文献を読めばよいか指導することがあります。学生の AI 利用については、明らかに自分で考えていないスライドやレジュメを出している人がいます。困ってはいますが、全体向けに、諸注意や使い方や倫理的配慮については説明しているので、それでも AI を「楽をするために」使っているな（発表では自分でうまくしゃべれないとか、提出物に明らかに創作したと思われるような範囲外の情報を入れてきているとか）、という人は黙って点数を下げています。特に選択科目、資格科目は、これだけ注意・説明・指導しているのだから、学生本人の責任だと思っています。
- AI 使用は避けては通れない。。。でも、AI と対話して出てくる課題が、必ずしも、こちらが期待するものにはならない（つまり、いい加減な課題が提出されることが増える）現実があり、全学的な AI 教育の場において、啓発的なものをやらないとならないとも思います。一方で、人文知は人間中心またはことば使用中心ですので、AI 依存教育にならない施策も必要でしょう。自分で考え、咀嚼し、整理し、推敲し、組織し、アウトプットし、推敲し、などの一連の作業において、人間が主導しないと人間の力そのものが弱る可能性も高いです。一方、AI と対話することで向上する能力も無視はできない。。。でも、本学にいる学生のことを考えると、両方が必要なことは間違いないのだけど、退行に拍車がかかる懸念も強く持っています。一方、（学生たちが）これまでの教育の中でできなかったことが、AI でできるようになるのであれば、AI を使いこなすことができる人材を輩出する方針の方に説得力を感じています。AI を使いこなせる学生なのか、AI に飲み込まれている学生を輩出するのか、という選択肢があるなら、前者が望ましいのですが、現状、後者になる可能性が高いわけです。全学的に、啓発講座ならびに実践講座を定期的に関講する必要があるのでしょう。
- 学生の興味関心をテーマとして具体化する際に、AI を用いることが有用ではないかと考えています。しかし、竹野先生が仰ったように、それは創造力の枯渇に繋がるかもしれません。
- すでにコメントシートを AI に作成させている学生が一定数見られます。AI の活用によって一見作業は効率化しますが、自分で考える過程を省いてしまうこともあります。その結果、理解や達成感を得にくく、学びの自信形成につながりにくい点を課題として感じています。
- コピペでそのまま出す学生の課題もあれば、少し AI の力を借りると思考が整理されそうな学生も散見されます。
- 発表をお聴きしても感じましたが、「意欲の高い学生は環境を活かして成長し、そうとも言えない学生は環境に埋もれがち」という教育の根本問題は、AI が普及した今も昔も変わらないと感じます。どの層を焦点とした教育を、どの時点で行うのか、より細かいレベルで言えば、どの層へのメッセージを、いつどのように

発するのか、学生のマッチングをどうより適切にしていけるかが、AI 利用に関しても課題だと思います。

自身では生成 AI をどのように使っているか。どのような課題を感じているか。

- 検索だけに利用していたが、そういう目的ではなく、使いこなしていくことの必要性を感じそれが課題だということもわかった。
- 文書作成、要約
- 事務仕事で使っています。
- 情報検索や研究における先行研究の探索など
- 授業内容の小テスト作成の相談に乗ってもらったりしています。最近はページが重く、反応が遅くて困っています。
- 1 日 20 分お昼の時間に壁打ち。可能性は感じつつ、自分でやった方が精度が上がることは間違いないと思っています。ただ、本日の遠藤先生の事例にあるように、事実関係の確認には AI は優れていると実感しています。竹野先生の実践例は、自分の論文を書く作業には適していないと思っています（自分でやる方が早い、自分が自分の文章を一番よく分かっているため）。
- 生成 AI は、使おうと意識しないとなかなか使わない気がします。事務職員も、日頃から AI による業務効率化を意識して取り入れられるとよいと思いました。また、今後の課題として、入試における生成 AI との向き合い方も今後議論していかなければいけないと思いました。
- 文章の校正や翻訳、エクセルの関数の相談など。適切な指示を与えないと、知らないうちに望ましくない情報が含まれている可能性があること。情報管理の問題について、自分の知識が足りないため、踏み込んだ活用ができていない。
- 自分の疑問点や考えを深めるために使用しています。また、外国語の文章の下訳作りや文章の推敲など、幅広く用いています。ありもしない事実を述べるハルシネーションがやはり一番の問題だと思います。必ず裏を取らないと怖いです。また、学生が AI を安易に用いることにより、能力の鍛錬ができなくなるのでは無いかということとレポートによる評価がきわめて困難になったことが懸念点です。
- まだまだうまく利用できていないと感じている。
- 表現確認や画像生成、文案作成、コーディング
- 毎日利用していますが、自分は USER であり、まだまだ使いこなせていないと感じます。
- 私はほとんど使いません。英語でメールを書くときに校正をお願いしたりします。

今後扱いたいテーマ、ご要望

- 今回のテーマについて、他の先生方の指導の状況を知りたい。
- 教員側の AI についての知識にばらつきがあると思うので、AI の基本的な使い方（実践編）についてのワークショップなどがあるといいのでは。
- 「キャリア支援教育とは何か」というテーマは、次回の改組の折に絶対に必要になるため、定期的に知識や経験が蓄積してゆくようにビルドアップしてゆく必要性を感じています。また、「AI と大学の目指すもの」というテーマも、継続的に必要であると感じています。かなり昔ですが、昭和女子が「バディ制度」を導入した折、脚光を浴びました。その後、どうなったのかも知りたいと思っています。
- 事務職員としての有益な使用方法、使用方法の留意点のレクチャーを受けたい。
- AI を利用した PPT の作り方なども勉強したいです。

2025 年度アセスメント報告会 実施報告

大学 FD 委員会副委員長
教務部長 古内洋平

講演資料・動画は下記よりご確認ください。

<https://ferris.cybozu.com/g/bulletin/view.csp?aid=23023>

<https://youtu.be/rCShRMzQ8F4>

日程 2025 年 7 月 30 日（水）16:30-18:00

場所 オンライン（Zoom）

題目 アセスメント・テスト分析報告会

対象 本学教職員及び博士後期課程学生

発表内容

- ・アセスメント・テストの分析結果の説明
- ・アセスメント・テスト活用事例紹介
- ・パネルディスカッション
- ・質疑応答

登壇者

嶋原 ゆり氏

（ベネッセ i-キャリア 大社接続事業本部 カスタマーサクセス 1 課）

講演会の概要

1. 開催にあたって： 口井 智史 学長室長

- 高等教育の現場では、教学マネジメントと学修成果の可視化がますます求められている。
- 本学では 2023 年度から新たに、株式会社ベネッセ i-キャリアの GPS-Academic（以下、GPS）というアセスメント・テストを導入し、現在の 1 年次生及び 3 年次生に実施した。このテストでは、学生が自らの成長を客観的に評価することができ、その要因を主観的に把握することができる。
- 今回の報告会は、結果分析を共有し、課題を認識することで、カリキュラムやプログラムの改善につなげる契機とすることを目的としている。

2. アセスメント・テスト分析報告：嶋原 ゆり氏（ベネッセ i-キャリア）

GPS-Academic 概要

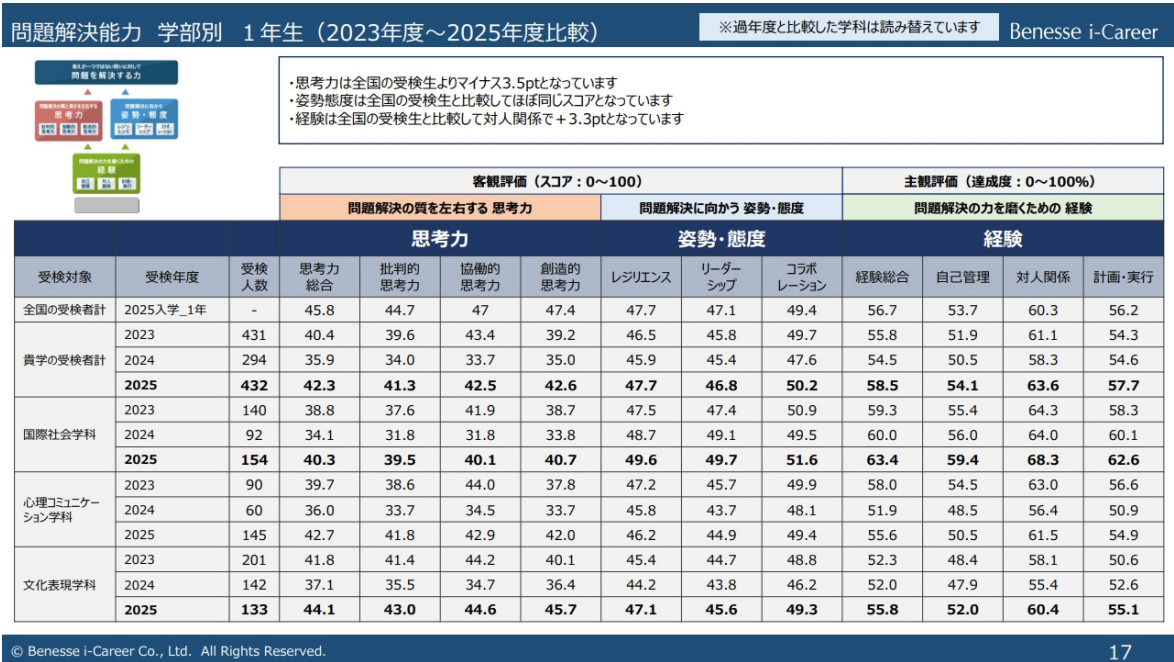
- GPS-Academic は問題解決能力を測定するアセスメント・テストである。

- 思考力、姿勢・態度、経験、学生意識調査の4つの領域で能力を可視化する。
- 2024年度単年の実績として215大学、28万人が受検し、日本の大学で一番使われているアセスメント・テストである。
- 高校、大学、社会で一貫した指標で測定可能である。
- 客観評価、主観評価（学生が自らの成長を客観的に評価し、その要因を主観的に把握できる）、意識調査を組み合わせて学生の状態を多面的に可視化する。
- 学生のキャリア形成にも活用可能である。
- 貴学では2023年度から導入をしている。今回、3年生は2回目の受検となるため、前回結果と比較したアドバイスコメントも結果に記載される。
- 結果分析を学内で共有して課題を認識し、その後カリキュラムやプログラムの改善というアクションにつなげていく契機とすることができる。
- 学生の能力の高低を、良し悪しではなく、現状のスタートラインとして理解し、ディプロマポリシーとどのように関連付けるか、どのような能力を伸ばしていくかという視点で見てほしい。
- 大学の学部改変後、初めての入試が実施されたが、入学する学生がどのように変わったのかを感覚ではなく、データで見ることができる。

データ報告

全体ダイジェスト

- 1年生432名が受検。受検率は89%。
- 「思考力」を全国平均と比較するとややビハインド。GPSを受検した1年生は大体39から45が平均のためおおよそ平均値。
- 「姿勢・態度」は、過去2年度と比較するとすべて前向きな結果が出ている。



- 経験については、全国と比較しても、過去2年度と比較してもすべて高いスコアが出ている。
- 全国との差分では、「思考力総合」が2年前は-1.9と大きくなかったが、24年度25年度はともに-3.7、-3.5と推移している。「姿勢・態度」はほぼ差がない。「経験」については、すべてのスコアでプラスが出ている。学生の気質が例年と少し違うのではないかと推察される。

- 全国の1年生と比較して、国際社会学科は「姿勢・態度」、「経験」のスコアが高いところが強み。心理コミュニケーション学科は「批判的思考力」、「コラボレーション」、「対人関係」に強み。文化表現学科は、全体にバランスがよいところが強み。
- 問題を解決するシーンで、積極的に関わろうという前向きな姿勢が表れる「姿勢・態度」のスコアが過去3年間で最も高い学生が入学している。2025年度の学部改組にあたり、大学公式Webサイトでも大学からのメッセージとして、「課題に積極的に向き合う」、「他者とともに生きる」というキーワードが打ち出された。そこに反応した学生だからではないか。
- 探究学習を経験してきた最初の1年生で全国的な変化を予測していたが、まだ数字の変化は出ていない。そんな中で「姿勢・態度」が前向きに出ているのは、上記の理由があるのではないか。
- 一方で「思考力総合」を横軸で、「リーダーシップ」を縦軸で見た思考力×姿勢・態度プロットデータでは、4象限それぞれ同じ割合の学生が存在する分散が見られる。
- 「思考力総合」と「リーダーシップ」、両方とも低い学生が次回受検した際に、どちらの力がどのように上がっているのかを見る必要がある。
- 「経験」の分野では、多様性を受容する経験スコアが72と高い。過去学生、全国平均と比較しても高い。70を超える大学はほとんどないため、大学としての強みと言える。
- 「学びへの意欲」スコアも全国平均、過去学生と比較しても70を超えており、高い。
- 学生は、大学としては「カリキュラム」、学問内容としては「教養教育が充実している」「入学後にコース選択ができる」という部分に魅力を感じている。大学が高校生に伝えたかった魅力が伝わり、入学してきていると言える。

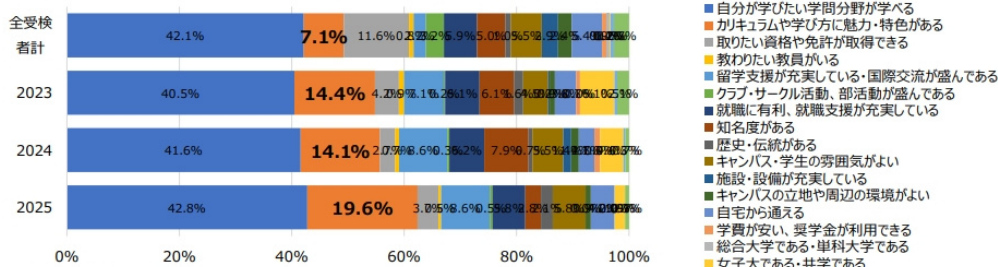
学生意識調査 1年生 設問「大学の魅力」

Benesse i-Career

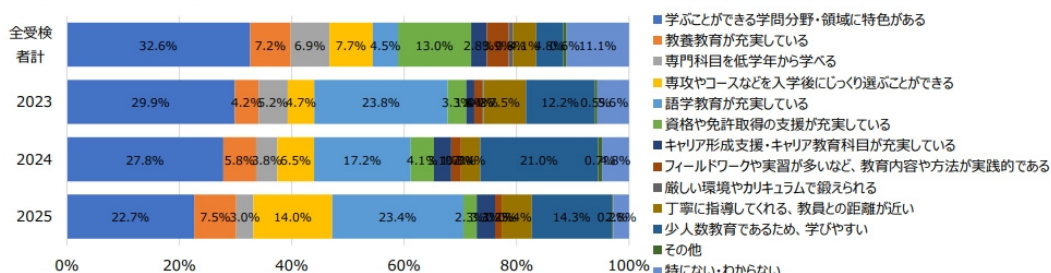
大学への意欲	
大学への意欲	
大学選択に役立った情報源	
AP/CP/DP理解度	
履修選択の考え方（楽々vs興味優先…）	
力を入れたいこと	
読書量/学習時間	
学びへの取組（予習・復習…）	
専門ゼミ/研究室への所属状況	
力を入れたいこと	
身に付きたい英語のレベル/留学経験/留学意向	
大学志望度/学部・学科志望度/大学納得度	
興味関心の一致度	
学生生活への不安	
再受験・退学の検討	
居住形態/通学時間	
卒業後の進路/進路への準備状況	
独自設問	

1学部制、コースは2年次から選択するという大きな変化があった2025年度。大学の魅力は「カリキュラム」、学問内容は「教養教育が充実」「入学後に選べる」という新体制に魅力を感じている学生が増加。

大学全体 1位



学問内容や学び方 1位



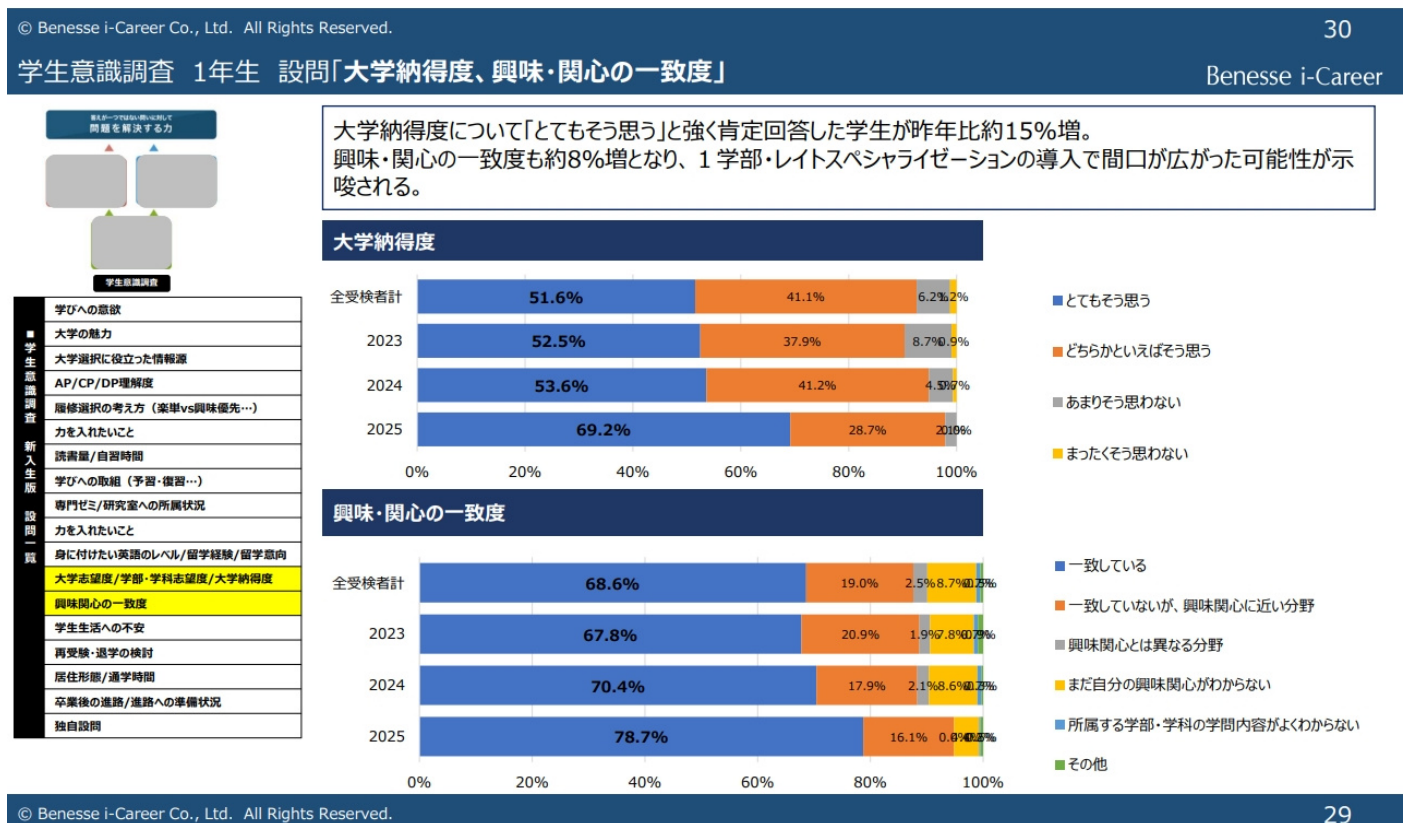
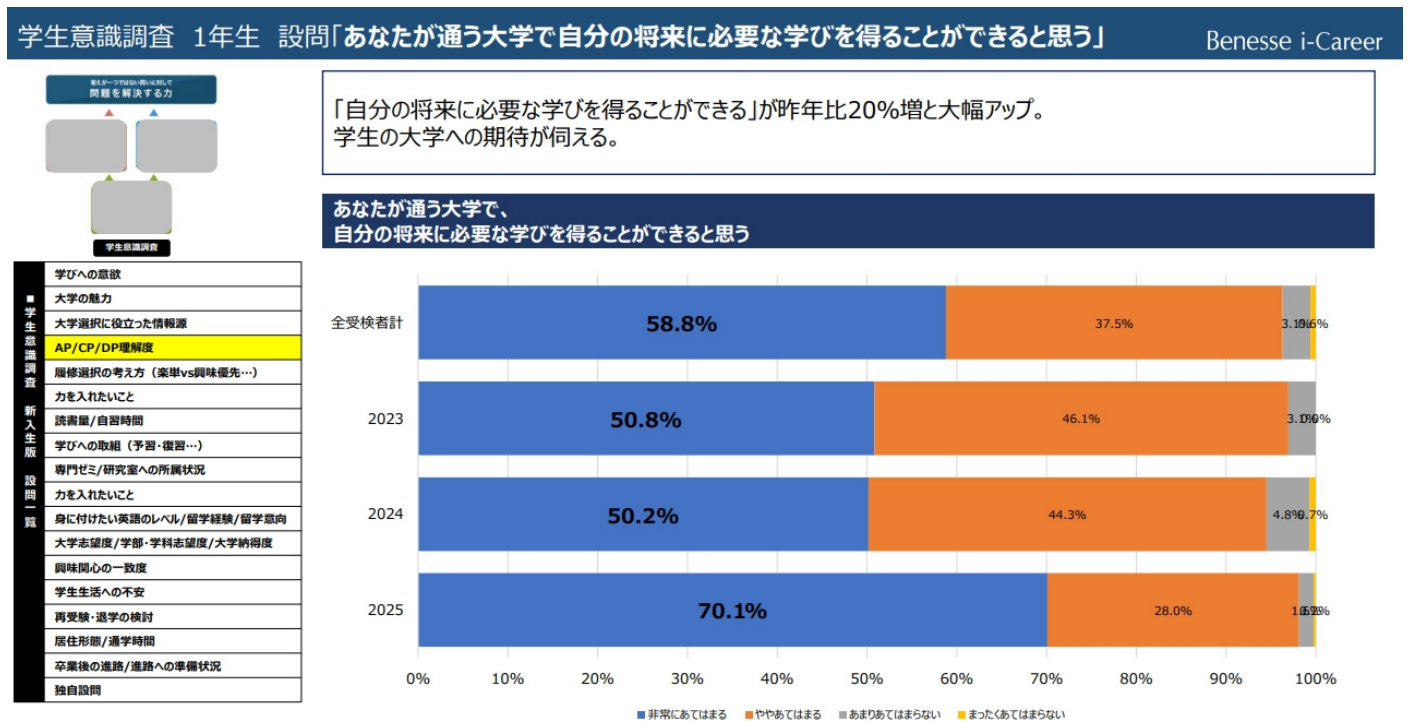
© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

27

- 大学選択に役立った情報源として、「家族・親族の勧め」「先輩や友人などの話」が高くなり、「特にない・わからない」が減少しほぼいない。高校訪問の結果が出たのではないかな。
- 大学納得度も高く、興味関心度も高くなっている。幅広く学びたい、1・2年次は基礎を固めたいという意識にヒットしたのではないかな。

「あなたが通う大学で自分の将来に必要な学びを得ることができると思う」という項目では「非常にそう

思う」が20%以上伸び、非常に高いスコアが出ている。



- 納得度、興味関心の一致度、大学への将来性、この3つは学生の大学への納得感に大変強く寄与しているデータとなる。入学してよかったと強く思える基本構造は、入試や入学年度では変化がない。ベネッセiキャリアのシンクタンクの分析により、一番重要な項目は「あなたが通う大学で、自分の将来に必要な学びを得ることができる」であることが分かっている。再受験や退学を全く考えない、興味関心が一致している、アドミッションポリシーを深く理解しているというポイントへつながっていく。
- 高校訪問で直接高校生とやり取りし、大学のことを理解しやすい構造を仕掛けられた成果が出たのではない

か。

- 学生が力を入れたことは、「語学に関する勉強」と3年間で最も多い。グローバル教養人材の育成の3つの柱のひとつが、学生にマッチしたのではないかな。
- 学生気質も変化が出ている。学生生活の自主性で「自主性に任せてほしい」が減少している傾向がある。
- 卒業後の進路の希望についても進路を未定と回答する学生が増える変化が出ている。学生が卒業後も活躍できるようにキャリアの視点からも支援が重要になってくる。

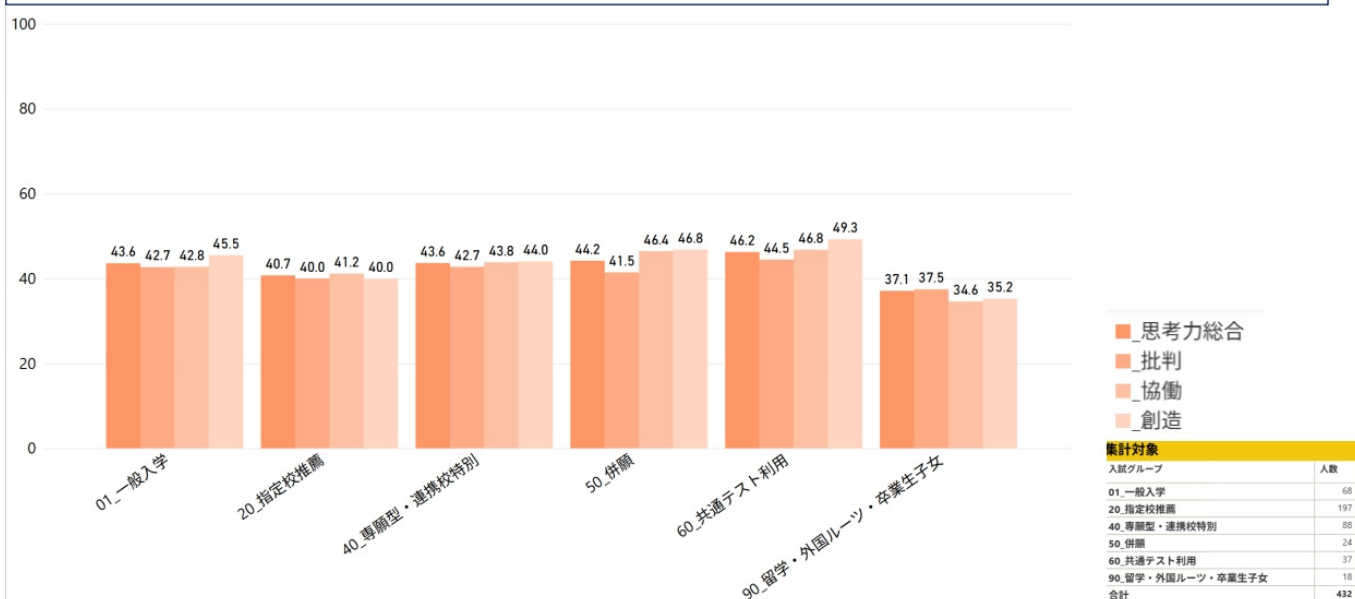
入試区分別集計

- 入試別に見た「思考力」は、共通テスト利用の学生が最も高い。これは全国的な傾向となる。専願型と併願型での比較をすると全体的に併願の方が高い結果となっている。箱ひげ図でばらつきを見ると、上下幅が大変広い学生が入学していることがわかる。必修授業でもすぐに理解が進む学生とフォローが必要な学生がいると思われる。
- 「姿勢・態度」についても、「レジリエンス」が最も高いのが共通テスト。「リーダーシップ」が最も高いのが留学・外国ルーツ・卒業生子女。「コラボレーション」が最も高いのも共通テスト。
- 姿勢・態度を箱ひげ図で見ると、「コラボレーション」では大きな差はなかったが、「レジリエンス」、「リーダーシップ」では幅広くなる。

問題解決能力 思考力 入試区分別 1年生（2025年度） <観点：AP>

Benesse i-Career

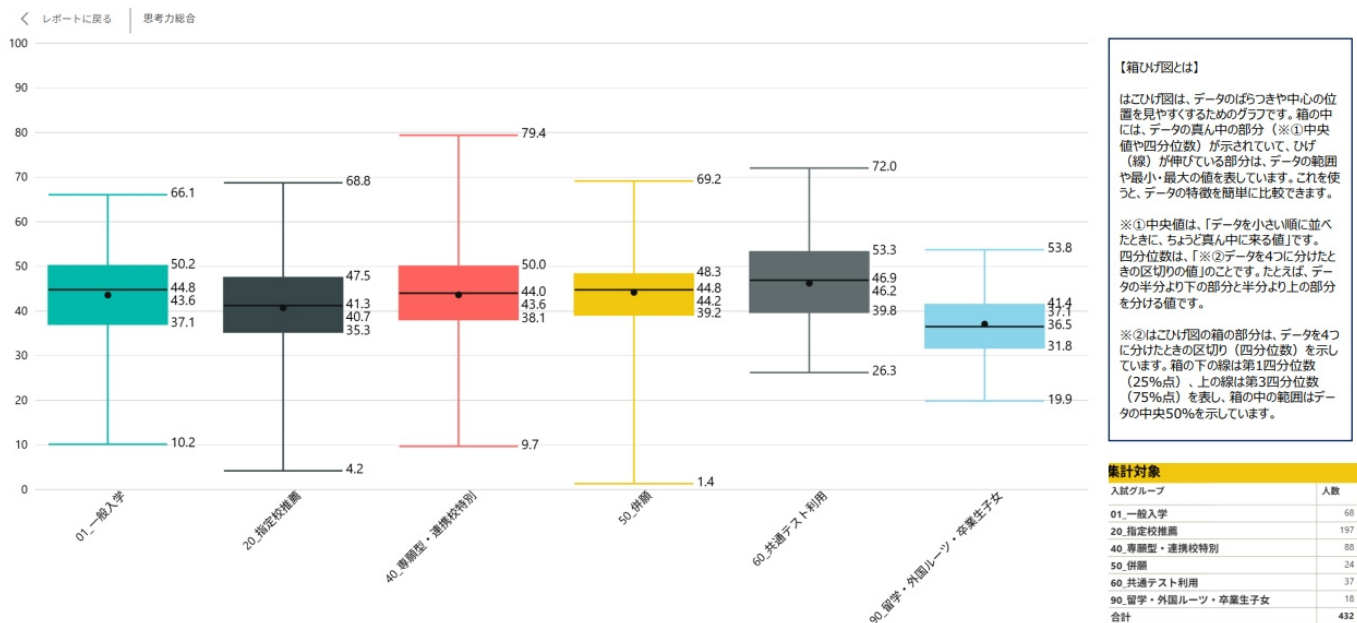
思考力総合において最もスコアが高かった入試区分は共通テスト利用。そのほか批判・協働・創造についても共通テスト利用が高い。専願と併願で比較すると、全体的に併願のほうが高い結果となっている。



© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

※入試区分は学生が選択したものです 35

平均値や中央値に極端なスコア差は見られなかったが、**専願は思考力の上下幅広い学生が入学しており、それに対して共通テスト利用や留学外国ルーツ系は幅が狭いことがわかった。**



© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

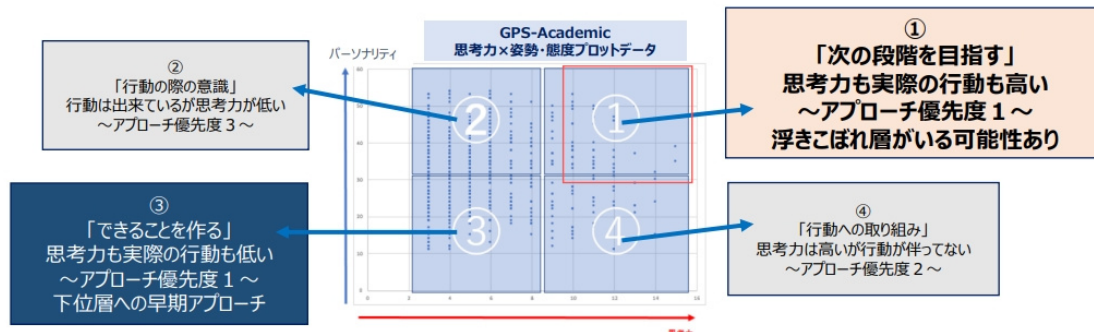
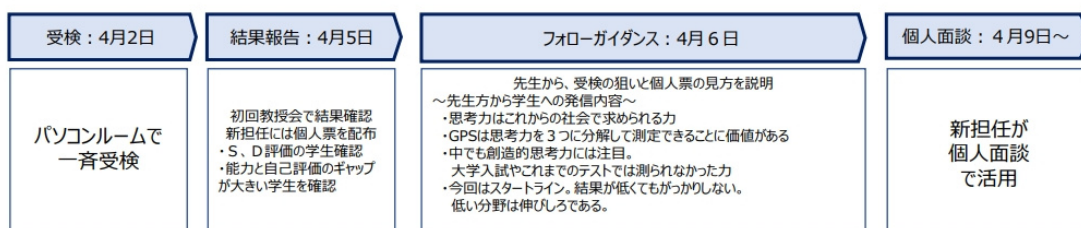
※入試区分は学生が選択したものです 36

- 入試別での「大学選択に役立った情報源」では、一般入試、指定校推薦、専願型・連携校特別では「HP」や「オープンキャンパスの参加」。併願や共通テスト利用では「家族」「予備校」「高校の先生」の割合が大きくなる。
- 専願、指定校に力を入れていくなれば、学生に会い、オープンキャンパスに確実に誘導することが最終的な大学選択に役立つ情報源になると推測している。
- 「授業と関わりのないことでも、興味をもったことについて自主的に学習する」では、入試区分との相関関係がかなり強い。
- 入試区分別に再受験や退学の検討をみると、あてはまると回答した学生は一般入試と共通テスト利用。専願と併願で比較すると、専願が1名、併願が4名となっている。学生が悩んでいる可能性があるため、確認をしてほしい。

活用事例の紹介

活用事例1：中退防止

- 工学院大学では思考力×姿勢・態度プロットデータを使用し早期アプローチのための分析をしている。



迅速かつ優先順位をつけた的確なフォローにより、1年生の中退率低減を実現

※活用・導入事例 工学院大学様（ベネッセ i-キャリアHPより）

https://www.benesse-i-career.co.jp/gps_academic/case/case17/

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

43

- 「思考力」も「姿勢・態度」も低い学生（＝できること、分かることが少ない）に最初にアプローチすることを推奨する。また、それと反対に「思考力」も「行動」も高い層は浮きこぼれてしまう。この大学でどう解決していくか、達成していくかというのがポイントとなる。
- 優先順位をつけ、まずは前述の2層の学生にアプローチし、そのあとすべての学生とコミュニケーションをとっていくのが望ましい。

活用事例2：アセスメント・テスト×アセスメント・テスト

- アセスメント・テストを別のアセスメント・テストと掛け合わせて分析している大学もある。
- 語学に強い京都外国語大学では、GTEC という英語の4技能を見るアセスメント・テストと掛け合わせて分析している。
- 大学の教育目標とは語学力だけではない。「思考力」「判断力」の育成を行い、語学を使ってどのように問題を解決していくかが重要である。そのため、どの学生にどのようにアプローチしていくのかを模索している。

活用事例3：安定的な授業運営

- 「思考力」の高い低い、「姿勢・態度」の高い低い様々な学生がいる中で、龍谷大学では安定的な授業運営を目指して、「思考力」と「リーダーシップ」の項目を目安にクラス分けを行った。学生が同水準で同じように切磋琢磨しながらグループワークができるようにした。

活用事例4：スコアアップ

- 摂南大学では、クリティカルシンキングに力を入れており、1年生の4月と12月ではスコアが変わった。きちんと勉強をすればきちんと伸びていくというプログラムの検証として使っている。

本学での活用

- 過去3年分のデータがあるので、様々なアセスメントの役割に対して使っていけるものが多いと考え

る。今後どのように使用していくかを考える機会にしてほしい。

1. パネルディスカッション

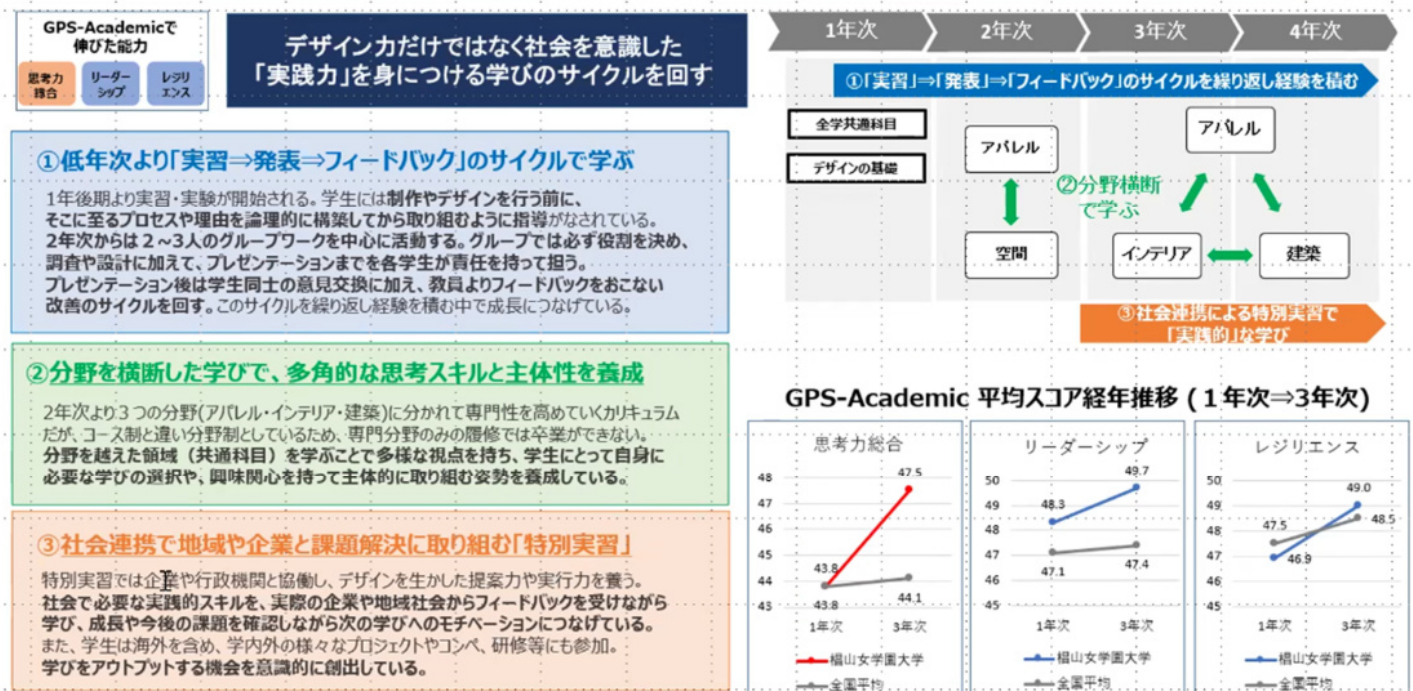
学長室 敦賀より今回の結果についてのまとめ

- [スライド](#)の共有
- サマリー、結果の確認及び学生面談カルテ、教職員間での結果の共有とどのように生かすか。

嶋原氏より追加事例の共有

- 梶山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科の事例。
- 1年次から3年次にかけて思考力総合が43.8から47.5へスコアアップしている。理由を先生方にインタビューしたところ、社会連携で地域や企業と課題解決に取り組む特別実習を実施していた。社会で必要な実践スキルを、実際の企業や地域社会からフィードバックを受けながら学んでいる。座学で得たものをアウトプットしている。
- 経験することを思い出で終わらせず、具体的な体験から本質的に重要なことは何だったのか、抽象化して展開していける実習が効いているのではないかと。今後のプログラムの企画で参考にされたい。

スコアアップ事例：創造とアウトプットのサイクル×社会連携による実践的な学び（梶山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科様） Benesse i-Career



© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

69

調査結果の活用について

- 学生面談カルテは退学への意向などが分かりやすくなっているが、他大学での活用事例を知りたい。

- 我々教職員がどのように結果についてフィードバックしているのか知りたい。

④学生指導：学生カルテを活用した「指導」への活動（千葉商科大学・国際教養学部様）

GS05
Benesse i-Career

大学入学後すぐGPS-Academicを受検し、その結果を教員との面談に活用。
学生にとっても現時点での自身の力の「現在地」を確認するとともに、
教員からポジティブなフィードバックをもらうことで今後の学びの行動意欲に結び付ける取り組み。

GPS-Academic活用による 「個人面談」の意義

- ・「すごいですね！」と褒めるための材料が得られた
 - ・教員側での当該学生に対する事前知識や先入観が皆無、学生が学びの成果を何も出していない段階でも、良いスコアを褒めることができた
 - ・これにより、学生の気持ちほぐし、会話の流れを作ることができた
- ・「なぜ、こういう評価がされたと思いますか？」と質問することで、学生の過去の人生経験に踏み込めた
 - ・評価で示された強み・弱みの理由について考えさせ語らせることで、その学生が過去に経験してきたユニークなエピソードと、そこでの「本音での思い」に触れることができた
- ・大学での学びを「成長へ向けた希望」と結びつけやすくなった
 - ・自分の成長のプロセスに関心をもたせることができた
 - ・能力的な側面だけでなく人格的な成長を意識させた（自信を高めた）



【参考】外部アセスメント活用セミナー（2021.04 千葉商科大学様）資料より抜粋：<https://youtu.be/wJYuRix7yJg>

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

58

- 工学院大学は中退に絞っていたが、千葉商科大学では現状の確認を行い、ポジティブなフィードバックを返している。教員と学生が初対面でありながら、学生の自己開示につながるきっかけができ、安心して学習できる環境整備につながっている。
- 学内で先生が自分のことを知ってくれていて、褒めてくれたという学生同士のやり取りが見られた。
- 大谷大学では、アンマッチで大学生活から脱落してしまう学生を減らす目的から面談カルテを使用している。注目する設問は「卒業後の希望進路」。本命でないのに入学したのではないか。「大学選択で役立つ

④学生指導：学生のアンマッチを減らす学生面談カルテ活用（大谷大学教育学部様 幼児教育コース）

GS12
Benesse i-Career

活用の狙い_意欲が心配になる学生が増加。アンマッチで大学生活から脱落する学生を減らしたい。



志望・興味関心	大学志望度... 学部・学科志望度... 興味関心の一致度... 他大学の再受験や進学を検討...	1. 第一志望だった 1. 第一志望だった 1. 一致している 3. まったくあてはまらない
大学への期待	大学の魅力(1) 大学全体 1位 大学の魅力(1) 大学全体 2位 大学の魅力(1) 学部内容や学び方 1位 大学の魅力(2) 学部内容や学び方 2位 大学選択に役立った情報源 1位 大学選択に役立った情報源 2位 学部・学科の教育目標を 知っている どんな学生に入学して ほしいかを語っている 将来に必要な学びを得ることが できると思う	01. 自分が学びたい学部分野が学べる。 04. 教わりたい教員がいる 01. 学びができる学部分野・領域に特色がある 06. フィールドワークや実習が多いなど、教育内容や方法が実践的 である 10. 先輩や友人などの話 08. 大学のオープンキャンパス 1. 非常にあてはまる 1. 非常にあてはまる 1. 非常にあてはまる
進路	卒業後の希望進路 就きたい職業や仕事の種類が	2. 公務員(教員・保育士を除く) 1. 非常にあてはまる

注目する設問

卒業後の希望進路→保育士、となっているか？
大学志望度→第2,3志望と実は本命ではないか？
大学選択で役立った情報源→特にない、は要注意
入試区分→指定校の場合は主体的に選んでいるか？

学生面談カルテは採択窓口であるキャリアセンターが作成して学科・コースに配信

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

59

った情報」が、「特に何も参考にせず」の学生はいないか。入試区分が指定校の場合は、主体的に選んでいるか、の4つの設問をメインに使っている。

- 初年次教育の中に GPS を活用した授業を入れてしまう取り組みもある。京都文教大学、(近畿大学では近大初年次ゼミ) で取り入れ、メタ認知を促している。SA (student adviser) 3 年生は自身が受検した経験があるため、1 年生に対して、結果をどう使ったのか、どう理解したのか、自分の特徴を生かした学生生活とはどんなものか、など経験を伝え盛り上げている。
- 筑紫女学園大学では、結果のレポートを見て、自分の新たな気づきや感想を書くワークシートを作成している。そして「自分カルテ」を作成し、自分がどのポイントが高く、どんなタイプなのかをメタ認知

④ 学生指導：初年次教育におけるGPS-Academicを活用したメタ認知・目標設定(京都文教大学様)

GS10
Benesse i-Career

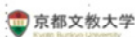
直接活用の事例：「大学入門」科目

授業の目的

本科目は、新たに始まる大学生活のために、大学での学びとは何かを考え、自ら、**現在地から4年間の学びを組み立てる方法を学びます。**さらに、京都文教大学の建学の理念である「四弘誓願」といふことについての理解を深め、4年間の学びを通じて、「ともいき社会」の実現にむけて必要な知識や能力、資質を身に付けていくために役立つ、様々な活動やきっかけを知る機会になります。また大学生活で出会う多様な他者の存在について、身近なところから、地域、世界に目を向けて考えられる視野を獲得していきます。(シラバスより)

授業の概要

- 全学部の1年生必修
- 主担当教員は学長。(他に、仏教やシテズンシップの専門教員がルー講義で担当)
- 第3回授業でGPS-Academicを活用した授業を実施
- 授業は今年度から、対面・ライブ配信・オンデマンド配信の3つの形式を採用



**全学必修の初年次教育でGPSの結果を活用した授業を実施。
学生の自己理解や、目標設定につなげている**

※2024年度GPS-Academicユーザー発表資料より抜粋

※京都文教大学HPシラバス(履修要)より引用

<https://unipa.kbu.ac.jp/uprx/up/pk/pky001/pky00101.xhtml>

直接活用の事例：授業のメニュー

- ① GPS-Academicの結果票の確認方法
- ② GPS-Academicの結果の見方
- ③ SAさんとの対話(1)「結果をどう理解すればいいの?」
- ④ ワーク(1)「自分が高かった項目を整理する」
- ⑤ ワーク(2)「過去の経験と結果とを関連づける」
- ⑥ SAさんとの対話(2)「自分の特徴を活かした大学生活の過ごし方」
- ⑦ ワーク(3)「自分の特徴を活かした大学生活の過ごし方を考える」



▼京都文教大学シラバスより

回数	テーマ&キーワード
1	4月8日(火曜) 5限 原則対面 担当教員全員 大学の学びとは?大学とはどのようなところ? - 探究、研究、学び、問い、価値と学生の違い
2	4月15日(火曜) 5限 担当教員:西・林 京都文教大学の建学の理念「ともいき」を軸に学生生活と3つのポリシー
3	4月22日(火曜) 5限 対面を推奨 ゲスト講師:「家庭社会学科」中野静恵先生 現在地と自己分析:GPSアカデミックとアセスメントシートから見る重要性 GPSアカデミックの結果を理解して、自分なりにやってみたいことなどを考えてみる
4	4月29日(火曜) 5限 オンデマンド 学生生活をイメージする「4年間の過ごし方、時間と空間」を出発点 課外活動・学外活動の意識:サークル、アルバイト、ボランティア、インターンシップ
5	5月13日(火曜) 5限 担当教員:西・林 作業をするので、対面を推奨 大学生活の方向性、目標設定、軌道修正 何を参考にすればいいの?、調べ方、情報活用方法

するきっかけとしている。

- 獨協医科大学や西南学院大学では、ベネッセ i キャリアから講師を派遣し GPS を使った結果の振り返

④学生指導：GPSの結果を入学前教育における学生の自己理解で活用（筑紫女学園大学様）

Benesse i-Career

GS11

入学前ワークシート 2025年度入学予定者 筑紫女学園大学

この入学前ワークシートは、皆さん一人ひとりが持っている力を確認したり、これからの活躍の場である筑紫女学園大学の情報を確認したりすること、大学生活から内定されるまでの、活動の場を皆さん、できる範囲で自分の「力」を自由に伸ばしていただくためのものです。

※記入欄は、入学前（入学前）に記入してください。

学年（入学前） 年 月 日 学科/コース

所属（入学前） 氏名

高校からの 記入欄

▶入学前ワークシートの作成について▶

以下のワークシートは、入学前教育の場面で活用してください。

1. 準備
【別紙1】【別紙2】参照

2. 作成
別紙1・2を各自のワークシートに記入（記入欄は各自で活用）

3. 活用
最終レポートでワークシートを参考に、自己理解を深め、入学後の活動に活かす（活用は各自で活用）

4. 提出
最終レポートの提出時に提出する

▶記入に記入してください▶

ステップ1：現在の自分の分析「GPS・Academic」受検後

① GPS・Academic（5段階）の受検後すぐに送られるフィードバックを見て、自分の現状を把握し、今後の目標を立ててください（GPS・Academicは3年次に2回受検の機会があり、結果は異なります）。

自分の強み 自身の課題、これまでに気づいたこと

結果レポート等を見て自身の新たな気づきや感想

ステップ2：これからの学びの場「筑紫女学園大学の研究」

② Webコンテンツ（別紙2）を参考に、筑紫女学園大学への理解を深めよう。

入学後の学びの場（筑紫女学園大学）をホームページ・ゼミ・大学案内・リーフレット・インディビジュアルから研究し、新たに気づいたことや興味を持ったことを、テーマ別にまとめてください。

テーマ1 入学する学科・コースでの研究の場

別紙2に記入した内容を参考に、筑紫女学園大学への理解を深めよう。

入学後の学びの場（筑紫女学園大学）をホームページ・ゼミ・大学案内・リーフレット・インディビジュアルから研究し、新たに気づいたことや興味を持ったことを、テーマ別にまとめてください。

筑紫女学園大学の研究「チクジョを知ってもらおう」
*カリキュラム編

テーマ2 研究の場、学生生活、コンテクスト、環境など

別紙2に記入した内容を参考に、筑紫女学園大学への理解を深めよう。

入学後の学びの場（筑紫女学園大学）をホームページ・ゼミ・大学案内・リーフレット・インディビジュアルから研究し、新たに気づいたことや興味を持ったことを、テーマ別にまとめてください。

筑紫女学園大学の研究「チクジョを知ってもらおう」
*学生生活編

ステップ3：大学でのチャレンジ

③ 大学で希望する授業・活動・研究に力を入れる。チャレンジしたいこととその理由を記入してください。ステップ1と2を参考に、今の自分で行ける範囲で挑戦してください。

チャレンジしたいことは何か 目指したいと思ったこと（理由）

入学後に挑戦したいこと。4年後の自分をイメージ

お願ひでしたら、以上でワークシートは終了です。

※別紙1参照「学生レポートフォーマット」を参照

※参考：2024年度12月GPS-Academicユーザー会発行資料より

■入学前教育の取り組みを入学後の学びに活かし、学生一人一人の成長につなげている事例■

入学前に取り組んだワークシートを、1年前期の「基礎ゼミナール」内で活用し、実践へつなげている

①GPSの結果を基に、現在の自分を整理 ※強み、課題 ⇒ ②授業内容、学生生活、部活動の研究を通して大学を知る ⇒ ③入学後に挑戦したいことを記載
【結果】

入学後に何をしていくのかを初めて考えるのではなく、入学前から考えることで、学びを含めた大学生活へのスムーズな移行を実現

© Benesse i-Career Co., Ltd. All Rights Reserved.

61

GPS-Academic活用状況

【2024年度～新たな取組】受検率UPの取組（受検の動機づけ）

●自分カルテ（2024年度3年生受検より実施）

<当初のイメージ>

（例）こんな感じてなら楽しいのでは！

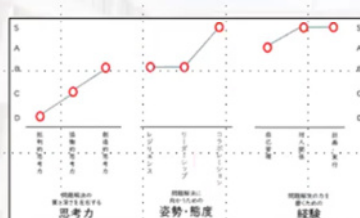
あなたは…

「勇者タイプ」（※ドラクエ的な）

これまでの色々な経験を活かして行動するところは、あなたの強みです。どんなモニター（困難）にぶつかっても勇敢に立ち向かっていく姿はまさに勇者です。

相手の立場や考えを尊重してチームを組もうとする姿勢は、教育者・保育者に適しているかもしれません。

思考力に関しては、大いに伸びしろがあります。自分の経験だけでなく、色々な視点で情報を集め、それを自分の経験と融合させることで、さらに力を発揮できるでしょう。



「思考力」をUPさせるには
○ その情報が正しいかどうか、一旦考えてみましょう。学習時は、情報の裏付けも調べてみましょう。

（例：レポート作成時に参考文献を見つける等）
○ 他の方の考え方を尊重する時は、その違いや良さなどを見つける視点で考えてみましょう。
○ 自分の経験を情報とつないで考えることで、物事を立体的に見てみましょう。

筑紫女学園大学

思考力

42

姿勢・態度

経験

自分カルテ

思考力

姿勢・態度

経験

自分カルテ

CHIKUSHI JOGAKUEN UNIVERSITY

GRADUATE SCHOOL OF HUMAN SCIENCES, FACULTY OF LITERATURE / FACULTY OF HUMAN SCIENCES / FACULTY OF CONTEMPORARY SOCIAL STUDIES

り会フォローアップガイダンスを実施している。自分の結果を見直しながらのように目標設定をしていくか、問題解決はどんなところで必要なのだろうか、というワークを行っている。

- 講師派遣でなく、資料を送付しフィードバックを先生が実施している大学もある。

- ディプロマ・ポリシー（以下、DP）達成度の検証について、他大学ではどのような項目と掛け合わせてデー

タ分析しているのか。

- DP と学内データと比較しながらどのように実施しているか、武蔵大学の事例紹介。卒業した 4 年生の GPS の結果を元に、修得した単位数やそれに対する倍率の設定をして学修度パーセンテージを独自算出している。学生が到達すべき DP を卒業した 4 年生の GPA に設定した点が秀逸。卒業した学生は DP を達成しているものとして、GPA と関連付けている。
- 卒業し社会人になりチームで問題解決をする際に、どの立場に立ってほしいのか。リーダーシップを取ってほしいのか、縁の下の力持ちのような態度を取りながら解決に導いてほしいのか。他者とコミュニケーションを取る必要性、多様な文化・カルチャー・価値観を持つ他者にどれほどの理解を示すべきか、GPS の指標をもとに議論を進めていきたい。

2. 質疑応答

質問:

独自設問を設定できるとのことだが、どのくらい追加できるのか。選択式のみか、自由記述も可能か。

回答:鳴原氏

独自質問は選択式で 50 問まで設定可能。例えば文科省実施の全国学生調査や大学独自の新生入生調査などと一緒に掛け合わせて実施できる。自由記述は 3 問まで設定できる。

質問:

個別データの利用の際の個人情報の扱いについて。例えば退学を考えている等のセンシティブな情報を実際に使っている大学では、どのように運用しているのか。学生のアカデミック・アドバイザーだけが見られるのか、学科でも一括で見られるようにしているのか。その場合、個人情報の問題をどのようにクリアしているのか。氏名レベルで閲覧可能とのことだが、受検者にあらかじめ伝えているのか。退学防止についても早期アプローチの際に「退学を考えているのか？」と聞いているのか。

回答:鳴原氏

- 多くの大学で新入学時に個人情報に関する同意書を取っているが、その中に GPS についても文言を付け加える大学が、特に関東圏の女子大学に多い。例えば TOEIC などの外部アセスメント・テストと位置づけ的には変わらないため、内容がセンシティブであっても、成績や能力に関わるものを使うという観点では必要になってくると考えている先生が多い。不安であれば同意書をとるのが一番良い。ある大学では使わないでほしいという学生が 900 人中 6 人いたので、除いているとのことだった。
- 他大学でも、退学を考えていると思われる学生に対して、直接的な表現は避けてアプローチしている。千葉商科大学の事例のように、学生が自分の思いを言えるような環境を作るのが面談カルテの役割。例えば「友達作りって難しいよね」「勉強についていきづらいことって今までもあったんじゃない？」などの婉曲的な質問でコミュニケーションをとっているとのことである。
- 「退学をしたい」という項目を見ずにアラートを立てるのであれば、姿勢・態度の中のレジリエンスとコラボレーションがどちらも D である学生のドロップアウト率が高いということが分かっている。姿勢・態度だけでピックアップすることも可能である。
- データへのアクセス権限だが、学部長、学科長だけが見られるという大学もあれば、学生面談をゼミ単位で行うため、ゼミの学生の分だけゼミの先生が見るといった閲覧可能範囲を区切って個人情報

報を守っている大学もある。

回答:敦賀

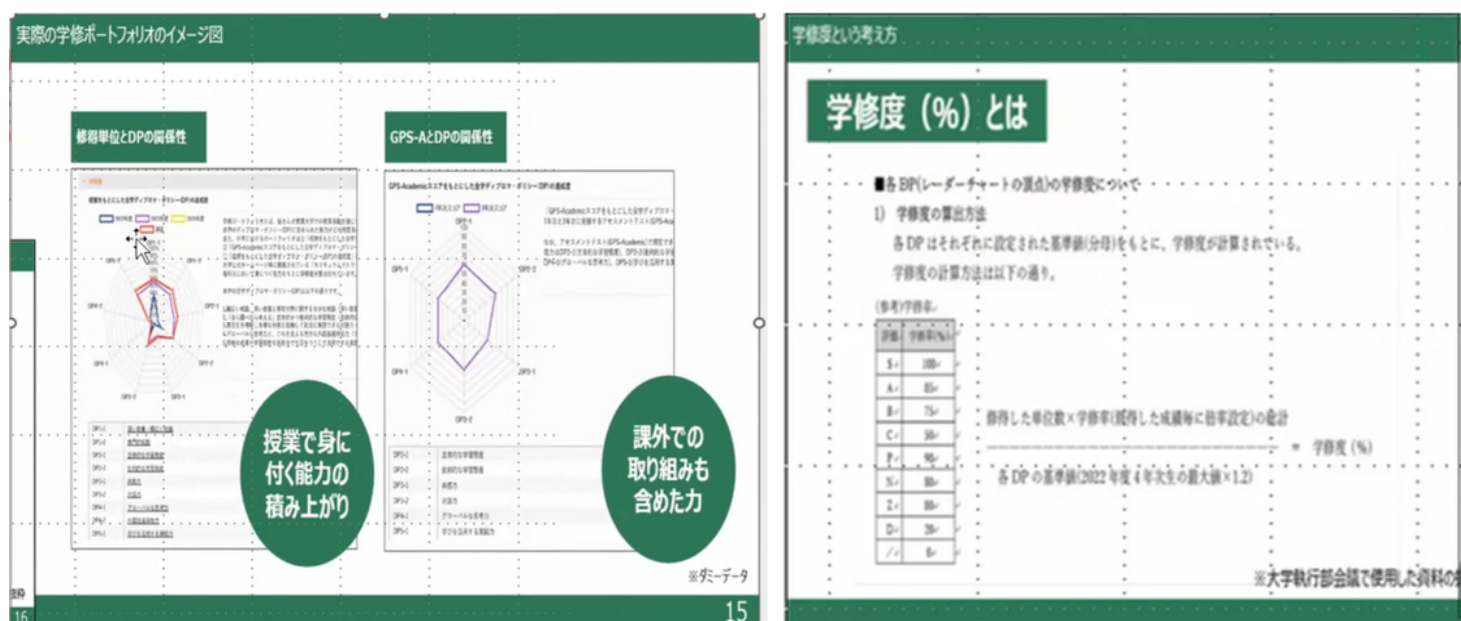
個人情報取り扱いについての同意書は一年生に関しては取っていない。入学前の3月から実施しており、教育の観点でデータを使用する可能性があるとのメールは送っている。今後要検討である。

質問:

武蔵大学の事例で、DPの測定にGPAを使用しているとのことだったが詳細を聞きたい。例えばDPに関係する科目でGPAを見るということなのか？

回答:嶋原氏

- 武蔵大学の取り組みは多くの大学で注目された。カリキュラムツリー、カリキュラムマップと組み合わせ、関連するものに対して評価がどれほどであったかを表している。図の外側がDPになっており、内側が前出の学習度となる。DPに関連する科目に集約して達成度を見ている。



- 学習度の計算式の分母がDPの基準値、これが4年生の最大値に1.2をかけたもの（より伸びる可能性があるため）DPの評価が、修得した単位数×学修率の総計となる。学修率は評価がSなら100、Aなら85と傾斜をかけている。

- 東京工科大学でも似たような学習成果についてまとめている。6つのラーニングアウトカムズがDPに該当し、それぞれがGPAの段階と外部アセスメントを分類し、掛け合わせたマッピングとなっている。

⑥DP達成度検証：学生のための学修成果の可視化（東京工科大学様）

Benesse i-Career DP04

DPの能力要素を分解し6つのラーニングアウトカムズを定義、GPSと紐づけて関連項目を設定。ポートフォリオ上では学生・教員共にラーニングアウトカムズを確認するシステムを構築した。

東京工科大学 ディプロマポリシー：

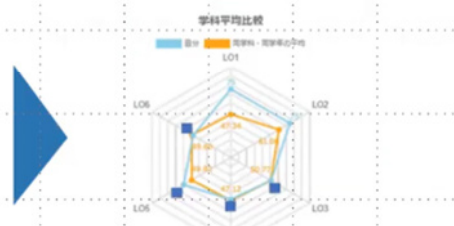
全学部共通で行われる**教養科目**と各学部・学科の特性に応じて編成された実学的な**専門科目**をともに修得しており、**コミュニケーション能力**、**論理的な思考力**、**分析・評価能力**、**問題解決力**を身につけているかどうか、学士の卒業試験に合格する基準となる。

GPS-Academicとラーニングアウトカムズの関係

	基礎評価			主幹評価			総括評価									
	思考力	協働的意欲	創造的意欲	リーダーシップ	コラボレーション	継続する経験	続ける経験	ストレスに耐える経験	多様性を尊重する経験	関係性を築く経験	議論する経験	課題を設定する経験	課題を立案する経験	実行・検証する経験		
ラーニングアウトカムズ	批判的思考力	協働的意欲	創造的意欲	リーダーシップ	コラボレーション	継続する経験	続ける経験	ストレスに耐える経験	多様性を尊重する経験	関係性を築く経験	議論する経験	課題を設定する経験	課題を立案する経験	実行・検証する経験		
国際的な教養																
実学に基づく専門能力																
コミュニケーション能力		◎			○				○	○	○					
論理的な思考力	◎	◎	◎													
分析・評価能力	◎															○
問題解決力		◎	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
成績評価 学生向け	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D	5段階 S～D
成績評価 教員向け	200点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D	100点満点 A～D

6つのラーニングアウトカムズ (LO)

- LO 1. 国際的な教養
- LO 2. 実学に基づく専門能力
- LO 3. コミュニケーション能力
- LO 4. 論理的な思考力
- LO 5. 分析・評価能力
- LO 6. 問題解決力



ラーニングアウトカムズを測定するための手法を**授業内評価 (GPA)**と**外部アセスメント**で分類。測定項目をマッピングした対照表を作成。

各学生のLOの伸びをレーダーチャートで可視化

質問:

レイトスペシャライゼーションを是として入学している学生が増えたとのこととで喜ばしい。「導入ゼミ」を担当しているが、例年に比べてとてもポジティブな学生が増えているのを感じている理由がわかった。思考力のばらつきがあるのを感じている。同じゼミでも難しいところが出てくる。語学などは習熟度別クラス編成ができるが、他の授業では難しい。また習熟度別にすることで多様性が失われることもある。他大学では浮きこぼれる学生、非常に思考力、プレゼン力の高い学生にどのような対策を取っているか？

回答: 嶋原氏

- 龍谷大学の事例ではあるが、PBL型の授業、一斉実施するような授業時に思考力やリーダーシップでクラス分けをしているというのが重要。本来はすべてのグループの深度を同じようにするため、思考力の高低や、リーダーシップの高低をブレンドしてグループを作る。
- ただ貴学においては、浮きこぼれている思考力の高い学生だけでグルーピングしてよいのではないかと考える。学生のロールモデルとなるグループを裏設定し、頑張れば頑張るほどいいものができるという成功体験を積み重ねてあげるのが合うのではないかと感じたがどうだろうか。

質問:

特進クラスという雰囲気を出さずに学生のニーズを満たしていけるようなものがあればご教示いただきたい。

回答: 嶋原氏

確かに集団が特別になってしまう可能性もあり、集団ごと浮きこぼれる可能性もある。社内で事例の確認をしたい。

質問:

思考力の低い学生層に対して、劣等感を持たせず能力を高めていく仕組みがあれば知りたい。

回答: 嶋原氏

劣等感を学生に持たせないというのは、非常に大事なポイント。学びの意欲が高く入学している学生が多いのに、ここでやっていけないと感じさせるのは申し訳ないこと。自分たちが提供できる思考力の底上げとしては、弊社で発行しているクリティカルシンキングの教科書がある。大学で求められる、考える力を一緒に学ぶものになっている。2・3年生に対しても使える。文書の基本構造、意見を言う、批判的に物事を見るときはどうか、を学ぶ内容となっている。

アンケート集計

発表内容についての評価／勉強会全体の長さ／開催時期・時間

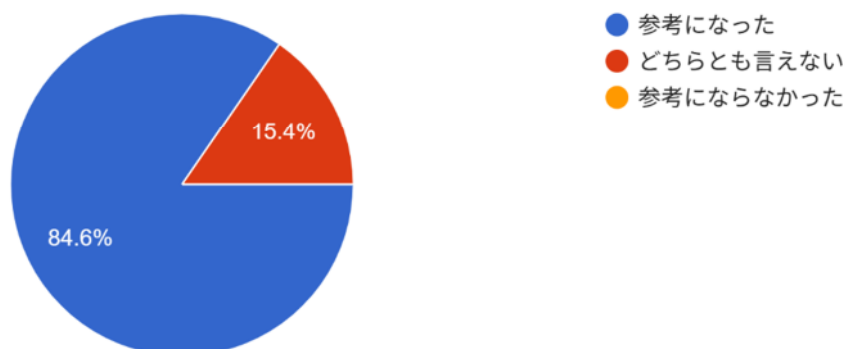
発表①（株式会社ベネッセiキャリア 嶋原氏講演）の内容について

13件の回答



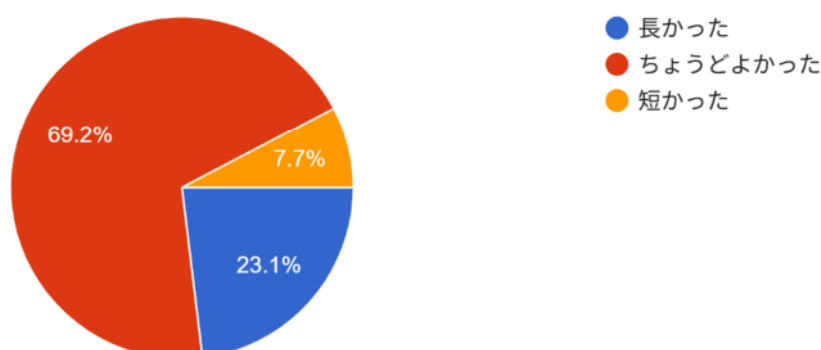
発表②（パネルディスカッション）の内容について

13件の回答



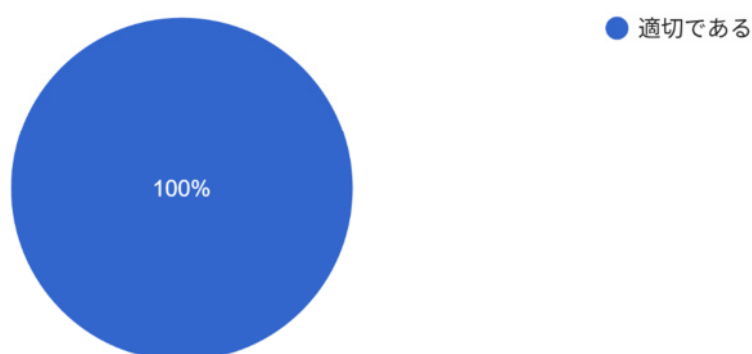
本勉強会全体の長さ

13件の回答



本報告会の開催時期・時間（適切でない場合は、「...に具体的な時期・時間帯を記入してください。）

13件の回答



鳴原氏講演についての感想

- 普段授業で接する個々の学生から帰納的に大学の特徴を我々は理解しがちだが、データに基づき俯瞰的に特徴を見ることでより解像度が上がった気がします。また、他の大学も本学同様苦勞しながら学生との対話を模索しているのだなという厳しい現実も分かってよかった。
- 学生の回答データから、学生の変化が大きく出ていることについて、丁寧なご説明をいただいたことは、平素の業務にも励みになる要素だと考えます。
- 今年度の入学者の考えていることや状況がわかり、大変参考になりました。
- とても論点が整理されていて分かりやすかったです。本学を納得して選んでもらえたことが分かり、とても嬉しく思いました。
- 大変わかりやすく、またフェリスの制度や最近の取組みについてよくご存知なことが、とても伝わってきました。
- 話し方が上手で聞きやすく、フェリスに対する思いも伝わって良かった。
- わかりやすかった。
- 話し方が上手で聞きやすく、フェリスに対する思いも伝わって良かった。

パネルディスカッションについての感想

- 大変的確な質問で理解が深まりました。
- これらのデータを教育改善につなげていくにあたり、特に学生と教員の面談という観点は今後復活させる必要があるのではないかと感じました（ご負担がかかるのは承知するところですが、「面倒見のよい大学」として少人数教育を掲げてきたうえでは、学生自己肯定感向上も含めたプラス要素ではないかと考えます。
- オープンキャンパスや高校訪問によって、生徒の大学での学びと進路選択のミスマッチを防ぎ、入学後の学修への動機づけが高められることを知りました。今後の広報活動でこの点を大事にしたいと思いました。
- 敦賀さんが論点を整理してディスカッションしてくださったので、大体の疑問はここで解決しました。
- ややテクニカルな話も多かったようにも感じました。教員レベルでは、荒井先生が質問されたような内容について議論したかった気もします、。
- 資料に目を通した上での質問応答だったので、参考になった。教職員が一緒になって改善していきたいという気持ちが伝わって良かった（敦賀さん、お疲れ様です！）。

発表及び勉強会全体に関する感想／今後扱いたいテーマ、ご要望

発表及び勉強会全体に関する感想

- 本勉強会は、任意プログラムではなく、大学教職員全員で共有し、本学の教育の在り方について1つの方向性を確認する場にしていたほうがよいのではないかと考えます。
- 教育、広報活動などに役立つ情報が多くあり、とても参考になりました。
- 経年で学生の傾向を知ることができ、とてもよかったと思います。新学部への1年生の期待感も、授業内でも感じていたところだったので、少し希望が持てた気もしました。他大学のケースも参考になりましたが、情報量的にはやや多めでもあったので、「フェリスの現状」と「他大学の事例研究」を、イベントを分けて開催してもよいのかな、とも思いました。また、職員のみなさんが知りたい部分と教員が知りたい部分に違いもあるかもしれないので、そういう分け方もありなのかな、とも思いました。
- 25年度入学者の傾向がわかり参考になった
- 新学部スタートに合わせて、新入生の傾向が分かったので参考にしたい。
- 内容が興味深かった。学科別のより詳細な分析も興味を持った（満足度、マッチング等）。

今後のFD活動で扱いたいテーマ、要望

- 各種学生データを用いた指導面談の実例や方法についてのワークショップなど
- 初年度の「導入ゼミ」について。1年生にとって一番重要な授業なので（少人数・大学での学び・友達作りなど）、GPS アカデミックの結果も参考にして、次年度から改善したほうが良いと思う。

以上